

### アブストラクト

従来、東アジアの沈んだ島伝説を話型として分類し、その中でどれが日本の「瓜生島伝説」と関わりがあるのか、具体的に論じた論考はなかった。沈んだ島伝説は沈没の予言方式によって、「旅僧予言型」「言い伝え予言型」「神様・夢予言型」の三つの話型に分類できる。このうち「旅僧予言型」は韓国の沈んだ島伝説「石仏、目赤くなると沈没する村」、「言い伝え予言型」は日本の「瓜生島伝説」に多く見られる。また神像の顔や石仏の鼻に塗るものが動物の血なのか、朱（絵具）なのかによって「血塗り型」と「朱塗り型」に分類できる。この中で「朱塗り型」は日本の伝承に多く見られるものであり、弥勒の鼻に血塗りをする「血塗り型」は韓国の伝承の多数を占める。大分の瓜生島伝説の成立には沖の浜に在住した瓜生氏や威徳寺が強く関与したことが考えられる。韓国の伝承は大雨による沈没の伝承が優勢を占めているのに対して、日本の伝承は津波・地震による島や村の沈没が主流をなしており、地震大国としての日本の特色が「瓜生島伝説」にも反映されていると言える。

**キーワード**：沈んだ島、瓜生島、洪水、津波、地震

### 1. はじめに

大学の授業で学生にレポートを課すと、主に地元・大分の学生を中心に毎年のようにあがってくるのが昔、別府湾に存在したが、ある日突然沈んでしまったという「瓜生島伝説」である。

故柳田國男氏は、この「瓜生島伝説」と関わる話として長崎県五島列島の小値賀島から上五島に渡る船の中で高麗島の話の聞き、「高麗島の伝説<sup>1)</sup>」としてまとめられている。

この伝説は後で詳しく紹介するが、地蔵菩薩が信心深い人々に自分の顔が赤くなったら早く逃げるようにと予言し、それを信じないで悪戯に絵具で地蔵の顔を赤く塗った悪者はすべて海底に沈んでしまったというものである。柳田氏は、「そんな有りもしない高麗島の話などのかつぎだして、人を面白く惑はしめた」人物、すなわち「高麗島伝説」の伝播者として海上を往来した九州盲僧を想定されている。

この「高麗島伝説」に類似する話が大分の地では、別府湾に沈んだ「瓜生島伝説」として伝承されている。「瓜生島伝説」については早くも市場直次郎氏により「沈んだ島の話<sup>2)</sup>」として資料の紹介とともに詳しい考察がなされており、伝播の経路について「南洋→支那→日本」と断定されている。

また岩瀬博氏は「沈んだ島—大分県瓜生島伝説を中心に—<sup>3)</sup>」において、各地の沈んだ島伝説を紹介し詳細に論じられている。そしてこの瓜生島伝説について、柳田説を紹介し、「座頭・盲僧の文芸」としてとらえられ、沈没の予兆を文献説話では「卒塔婆に血が付くと」とするのに対して、各地の伝説では、「目が赤くなると」と、目にこだわっている点も盲僧伝播の痕跡であろうと推測されている。さらに「沈没予兆伝説の構造を、津波によって村が埋没するに、神の加護を受けた人間がその難を逃れた話とすれば、洪水始祖神話に通底している」と述べられ、洪水始祖神話からの派生伝説

<sup>1)</sup> 「島の人生」一九五一年一月、創元社より発行。『定本柳田國男集』第一巻（一九七八年四月、筑摩書房）所収

<sup>2)</sup> 『郷土趣味雑話』（一九三二年十一月、金洋堂書店）所収

<sup>3)</sup> 『大谷女子大國文』三三号、二〇〇三年三月、「伝説と歴史 沈んだ島」（日本口承文芸学会『シリーズことばの世界 第3巻 はなす』二〇〇七年十二月、三弥井書店）

である可能性についても密かに言及されている。

これらの研究を見ると、柳田説にしろ、市場説にしろ、高麗島伝説と瓜生島伝説は、中国から直接伝来したものとされているが、もしそうなら、なぜ朝鮮半島に存在した高麗という国の話として伝承されているのかについての説明はなされていない。

また盲人が雨乞い行事を行うなど、水との関連が深いことからみれば、岩瀬氏の指摘の通り、「瓜生島伝説」の伝播者として民間宗教者の座頭や盲僧を想定するのは納得のいくところである。しかしその裏付けの一つとして、「各地の伝説に目が赤くなると目にこだわっている点も盲僧の伝播の痕跡」と推測されているが、筆者の調べたところでは、日本の伝承で目にこだわっているものはほとんど見当たらず、「ただ神像の顔が赤くなると沈没する」となっており、目にさほどこだわらないものが主流となっている。だからこれを根拠として、沈んだ島「瓜生島伝説」の伝播者を「座頭・盲僧文芸」として捉えるのはやや無理があるかも知れない。

そこで本稿では、沈んだ島「瓜生島伝説」について兄妹結婚始祖説話を含む洪水始祖神話の一類型として捉え、今まで具体的な比較研究のなかった韓国の沈没伝説「石仏、目赤くなると沈没する村」の諸伝承を紹介し、両者を具体的に比較検討し、その特徴や伝播の経路を明らかにしたい。



沈んだ島「瓜生島伝説」が伝わる別府湾（立命館アジア太平洋大学の構内より）

## 2. 韓国の洪水神話

『古事記』上巻には兄妹結婚始祖譚と一つと見られる「イザナギ命とイザナミ命」による国づくり神話が記載されている。天の神々がイザナギ命とイザナミ命に、「是のただよへる国を修理ひ固めなせ」といい、そこで二神は天の浮橋に立って、天の沼矛でかき鳴らして引き揚げた時、矛先から落ちた潮が積もって島になった。それがオノゴロ島で、その島に天下りをされた。その後、二神は兄妹でありながら結婚することになるが、女神が「あなにやし、えをとこを」と先声をあげたため、欠損した水蛭子と淡島を生んだので捨て、御子の数に入れなかった。今度は天の神に聞いてやり直した結果、正常な日本の島々を生んだという。このイザナギ命とイザナミ命神話には洪水神話の兄妹結婚始祖譚の痕跡や、なぜ女神が声を先にあげたのが失敗に終わったとするのか、これはおそらく兄妹結婚の近親姦による欠損した子の誕生を忌み恐れる思想が秘められていることが考えられる。このような兄妹結婚始祖神話は、韓国の洪水神話のなかでも

いくつか見られるので、次ではそれらを検討してみたい。

#### 大洪水と人類—兄妹結婚始祖神話<sup>4</sup>

昔、大洪水が起こって、世界はすべて海と化し、人間がすべて絶滅してしまったことがあった。そのときただ二人の兄弟が生き残って白頭山のように高い山の最高峰に漂着した。やがて洪水が退いたので、兄妹は世間に降りてみたけれども、人間の影さえ見出すことができなかった。もしこのままにして置けば、人間の種は絶えてしまわなければならなかったけれども、だからといって兄妹で結婚するわけにもいかないので、兄妹は長い年の間、あちらこちらへと人間を探して歩いたが、そうするうちにだんだんと年を取って来るので、やむを得ず彼らは各々片方ずつの挽臼を持って、向かい合いに立っている二つの峰の絶頂にそれぞれ登り、妹は雌臼<sup>めすうす</sup>を以て転がし、兄は雄臼<sup>おす</sup>を以て転がした。そして彼らは天の神に向かって祈った。ところが臼の両片は不思議にも谷の底で恰も人がわざわざ合わせたようにぴったりと合いついたので、兄妹はそこで天の神の意思がわかり、二人で結婚して人間の種を再び継続させた。彼ら兄弟は実に今日の人類の祖先であるとの話である。あるいはまた、彼ら兄妹は二つの峰から青松葉をそれぞれ燃やしたところ、その煙が不思議にも空中で相合したので、天の神の意思がわかり、兄妹で結婚したともいわれている。

これは大洪水が起こり、生き残ったのが兄妹しかいなかったので結婚するしかなかったが、すぐ結婚に踏み切れない。そこで日本の『古事記』においてイザナギ命とイザナミの命が天の神に二人の行為についてうかがったように、ここでも臼を転がすという古い行為を通じて、結婚してもよいという天神の意志を確認し、二人は結ばれ人類の祖先になったというものである。最後に兄妹しか残っていなかったのが当然ながら近親相姦という重い課題に直面することになるが、この神話ではやはり臼を転がすという古い行為を通じて近親相姦という問題を避けようとする思想がうかがえる。

#### 兄妹結婚—羅氏の始祖神話<sup>5</sup>

慶尚北道高霊の羅氏は今でも常民とされている。その理由は次の通りである。壬申倭乱が起こり人間は皆死んでしまったが、残ったのは二人の兄妹だけであった。二人は人間の種を残さなければならなかったが、兄妹であったので結婚するわけにはいかなかった。そこで二人は二つの山の峰にそれぞれ登り、青い松葉に火をつけながら天神に祈願した。「天神様よ、もし私たちの種を残してくれるつもりなら両方の峰から登る煙を空の上で合わせて下さい。反対に私たちの種を絶つつもりなら離れ離れに散らせて下さい」と言った。風ひとつもない天気であったのに両峰から登る煙が不思議にも空でぴったりと出合った。二人は天の意思が分かり、兄妹でありながら結婚し、後世にその種を残したのが今日の羅氏である。

これは先ほどのように、洪水によるものではなく、壬申倭乱という戦争で生き残った兄妹が、兄妹なのですぐ結婚するわけにはいかなかった。兄妹は思った末に松葉を燃やしてその煙が空中で出合うのを見て天の神の意志とわかり、結婚して羅氏の始祖を生むというものである。ここでもやはり松葉を燃やして天の意思を確認する方法を取っており、近親相姦を避けようとする努力が強くなされていると言える。

#### 大洪水と人類—人類の祖先神話<sup>6</sup>

昔、大洪水が起こった。長い間の大雨と津浪のため、この世界はすべて海になってしまい、生き物は勿論のこと、人

<sup>4</sup> 孫晋泰『朝鮮の民話 民俗民芸双書7』（一九六六、岩崎美術社）所収

<sup>5</sup> 前掲注4）に同じ

<sup>6</sup> 前掲注4）に同じ

間という人間はすべて絶滅してしまった。そのうちただ二人だけが生き残って高い山頂に漂着した。二人は大きな木に載っていたのである。洪水が引き世界は元の通りになったが、人間は一人も残っていなかったので、彼ら兄弟が結婚しないと人間の種は途絶えてしまうものであった。しかし兄妹で結婚するわけにはいかなく、二人はついに老いぼれ、髪の毛も抜け始めた。その時、一匹の虎がどこからか一人の男を連れてきたので、妹はその男と結婚して子を生み、ついに今日の人類の祖先となったともいわれている。

この説話は先ほどの二つの兄妹結婚神話と違って、兄妹ゆえに結婚できないままでいると、一匹の虎が一人の男を連れてきて、妹はその男と結婚して人類の祖先になったというものである。すなわち、二人は兄妹関係にあるので結婚ができなく、そこで人間ではない虎を使い、一人の男性を登場させ、妹と結婚させ子供が生まれたとする展開になっている。この神話ではその生まれてくる始祖の神聖さと強さをアピールしながら、一方では近親相姦に対して強く否定しようとする努力がなされていると言えよう。

たるれこげ  
**誘惑峠伝説 一兄妹結婚の禁忌<sup>7</sup>**

1. にわか雨の降るある日、山深い峠道を超えていく姉弟がいた。
2. 弟は濡れた姉の体を見て情欲を感じ、罪悪感のあまり男根を石で突いて自殺した。
3. びっくりした姉は「このように空しく死ぬならせめて誘惑でもしてくれたらよかったのに(タレナボジ・・・)」と、突然の弟の死に嘆き悲しんだ。
4. 今でも誘惑峠、また誘惑江という所が残されている。

これは洪水伝説でも兄妹始祖神話でもないが、「雨の中での弟の姉に対する強い性欲」が核心要素として語られている点で、洪水による兄妹結婚始祖神話の崩れたパターンとしてとらえることができる。弟が罪悪感のあまり男根を石で突いて自殺したと叙されているところから見ると、近親相姦を犯した場合には誰でもそれはすぐ死と直結する問題であること、近親相姦は絶対に許せないものであることを強く主張した伝承と言えよう。

**大洪水と人類一日光感精型人類の祖先神話<sup>8</sup>**

昔、ある所に大きな桂の木があり、その下には常に一人の仙女が降りてきて休んでいた。仙女は樹精に感精して一人の美童子を生み、木道令と名付け、その子が七、八歳になった頃、子を産んで天に帰った。

ある日のこと、急に暴風雨が降り始め、何カ月も続いたので地上は荒れ海になり、桂の木も倒れてしまった。木道令は父なる大木に乗り、何日も波に任せて流れて行った。途中、たくさんの蟻や蚊が流れきて、「助けてくれ、助けてくれ」と叫んだ。木の父に助けても良いのかと聞いたら、「はい」と答えたので木の上に乗せた。次は一人の男の子が流れきて、「助けてくれ、助けてくれ」と言うので、また父なる木に聞くと、今回は「だめだ」と強い口調で言うものであった。あまりにも可愛そうだったので父に強くお願いすると、「ではお前の勝手にしろ」と言うので木の上に乗せた。一行は流れ流れてある島の高い峰に着き、そこには婆さんが二人の娘と一緒に住んでいたが、そのうち一人は実の娘ではなかった。やがて洪水も引き、この世は平穏を取り戻したが、すべて滅び、人間というものは男の子、女の子それぞれ二人と婆さんだけであった。やがて娘たちが年頃になってきたので婆さんは実の娘を賢い男に結婚させようとした。それを察知した拾われた男は婆さんに、「木道令は不思議な才能の持ち主です。一石の粟を砂原に巻き散らして置けば、半

<sup>7</sup> 崔来沃『韓国口傳説の研究』(一九八一年、一潮閣)

<sup>8</sup> 前掲注4)に同じ

日も経たないうちに一石そのままを元通りの俵に戻し入れる能力を持っています。試してみてください」と、嘘を言った。木道令が困っていると、助けてあげた蟻がたくさん仲間を連れてきてひと粒の粟も残さず、元通りに戻した。婆さんは誰に実子をあげたら良いのか迷い、「今夜二人の娘をそれぞれ東の部屋と西の部屋に入らせて置こう。どちらに当たるかはお前たちの運であろう」と言った。今回も木道令が迷っていると、助けてあげた一匹の大きな蚊が飛んで来て、「東の部屋だよ」と教えてくれる。そこで木道令は婆さんの実の娘と、拾われた男は残りの娘と結婚し、子供を生み、その二組から生まれた子供たちが今日の人類の祖先となった。

これは、桂木の樹精に感精した仙女から生まれた子供が洪水に遭い流されるが、父なる桂木に乗って無事に島の山頂に着いて助かる。そしてそこに住む老婆の試練に見事に耐え、その娘と結婚し、そこから生まれた子供が人類の祖先になったというものである。この神話は日光（太陽の光）に感精した美しい姫君が子供を身ごもり、生まれた子供が親を訪ね、その親の試練に耐え、後、人類の始祖になるという、いわゆる「日光感精神話<sup>9</sup>」に属するものと言えよう。この説話は洪水によって、すべてが減び、残った二組の夫婦によってこの世が新しく創造されるという創造神話としての性格も保持していると言える。また子供は洪水によって流されるが、父なる桂木に乗ったお陰で島の高い峰に着き、善人と悪人二人が生き残り、そこに住む二人の娘と結婚して生まれた子供が人類の祖先になったというもので、人類起源洪水神話としての性格が強い。しかし、善人と悪人の二組の夫婦がそれぞれ他人ということ、なお彼らが結婚して人類の始祖になったということを叙しており、近親相姦による始祖誕生を否定している。すなわち、木道令という善良な男にもう一人の男を登場させ、近親相姦を避けようとする意図がうかがえる。

また善悪の人間二人を対比させて語られており、人間の善悪誕生の由来譚ともなっている。命の恩人であり、善良な男に対して、トリックを使ってお婆さんの実の娘を手に入れる優位性を確保しようとする悪い男は、誠実な蟻が善良な人間を助けることによってその夢は叶えられなくなる。この趣向はシャーマンの創世神話に見える、本土の弥勒と釈迦の花咲かせ競争や済州島の「天地王本解」に見える、兄妹によるこの世とあの世の統治権をめぐる花咲かせ競争にきわめて類似する。また、「天地王本解」において善良な兄がトリックを使って花咲かせ競争で勝った弟にこの世の統治権を譲りながら、この世に悪が蔓延することを予言するのも上記の洪水神話に見える悪人始祖誕生ときわめて近い。

以上、洪水神話は兄妹結婚という近親相姦が神話の核心要素となっていると言える。ただ洪水が起こるのは人類の悪によるものなのか、または神々の争いによるものなのか、あるいは偶然的自然災害として起こるものなのか、その洪水の理由がはっきり説明されていないのが特徴であるが、上記のように洪水神話には始祖神話や創世神話としての性格も強く表れていると言えよう。

### 沈没の長者池伝説一亡婦石説話<sup>10</sup>

京畿道開豊郡北面の婆さん原<sup>はるみぼる</sup>は、その昔大きな村であったと言う。高麗時代にある道僧がこの婆さん原に現れ、一日中家々を回りながら仏様への施しを求めたが、施しどころか誰一人として一度の食事を出してくれる者がいなかった。こうして道僧は夕方になりお腹が空いたこともあって、ある路地の小豆粥の店に着き、施しに来たと言うと、お粥を売っていた老婆は、人情味溢れる人で優しくもお粥を一皿入れて道僧にあげながら、「お坊様、お腹が空いていらっしやるで

<sup>9</sup> 日光感精神話については福田晃氏「奄美・日光感精説話〈神の子遊返型〉の伝承—その重層性を中心に—（『南島説話の研究』一九八二、三弥井書店）、同氏「日光感精説話の重層性」（『南島説話の研究』一九九二、法政大学出版局）、依田千百子「朝鮮の叙事巫歌と日本の中世神話との比較研究—神の子遊返型日光感精説話を中心として」（『朝鮮民俗文化の研究』一九八五、瑠璃書房）、拙論「本解「帝釈クッ」と本地物語「浅間本地」・神道集「見持山之事」（『本地物語の比較研究—日本と韓国の伝承から—』二〇〇一、三弥井書店）など参照

<sup>10</sup> 崔常樹『韓国民間伝説集』（一九八四年、通文館）

しょう。まず、このお粥一杯でも召し上がってしばらく休んでいらっしやって下さい」と言って、親切な心を忘れなかった。すると道僧はそのお粥を全部食べてありがとうとお礼のあいさつをして、しばらく立ち止まって何かの呪文を誦えた。そして小豆粥屋の老婆を見て言うのは、「明日の正午にこの村は湖になるだろうからあなたは簡単な荷作りをして、明日の正午になる前にあの山の丘を越えて行って下さい。しかしこの話は誰にも言うてはいけません。また、丘を越えて行くとき、後ろから何か音がしても振り向いたらいけません」と何回も言うて置いて、どこかへ行ってしまった。この話を聞いた小豆粥屋の老婆は、その僧がただの人ではないと直感で分かり、その夜、人が分からないよう荷作りをして置いて、翌日の正午になる前に村を去り、道僧が教えてくれた丘に至った。すると後ろからうさい音が聞こえてきたので、道僧が言った言葉をうっかりと忘れて後ろを振り向いて見ると、自分が住んでいた村は、道僧の言う通り、湖になっていった。そこで老婆はその場所に立ったまま石になってしまった。こうして人々はそこを婆さん丘と呼んだそうだ。また湖になった村はそれ以降、原になったので今でもその原を「婆さん原」と呼んでいるという。

以上は、見てはいけない道僧の禁忌を破った老婆がその場で石になり、人情味のない悪に満ちた村は湖になり沈没してしまうという洪水型夫婦石伝説と言える。なぜ善良な老婆に絶対に「見てはいけない」という禁忌が与えられ、老婆は石になってしまう悲劇の結果を迎えなければならなかったのか、その理由が判然としないが、「見るな」という禁忌を破って悲劇の結末を迎えるのはこの説話だけの問題ではなく、旧約聖書の「ソドムとゴモラ」や『古事記』上巻の「黄泉の国」、「鶺鴒草葺不合命の誕生」の条などをはじめ、世界各国の伝承に見られるものである。とにかくこの説話は、町が湖になったのが人間の悪によるものであるとその原因がはっきり示されていることが、先に述べた洪水兄妹始祖神話と大きく相違する点である。このように沈没の原因がはっきり示されている伝承が韓国には数多く存在する。それは沈んだ島伝説として日本の「瓜生島伝説」と同類のもので、韓国では「石仏、目赤くなると沈没する村」の名称で呼ばれている。

### 3. 韓国の沈んだ島伝説「石仏、目赤くなると沈没する村」

韓国の民俗学者の孫晋泰氏は早くも、日本の瓜生島型の沈没伝説として「広浦伝説<sup>11)</sup>」を紹介されている。「広浦伝説」は、後で触れるが、昔広浦は大都会であったそうであるが、「石像の目から血が流れたら高い山に避難するように」と旅の僧が予言をしたが、町の悪い青年たちはそれを信用せず、その上、赤い染料を石像に塗って、それが原因で町は沈没し、善良な老婆だけが生き残ったというものである。

広浦とは今の北朝鮮の咸境南道地方の地名であるが、そこに伝わる伝説であることから広浦の名前が付けられた。この「広浦伝説」の名称をめぐって韓国の研究者は、沈んだ島伝説としての名に相応しくないとして、韓国民間説話の集大成とも言える『韓国口碑文学大系<sup>12)</sup>』などでは、「石仏、目赤くなると沈没する村」と名付けられている。

民俗学者の権泰孝氏は、韓国の洪水説話は「ノアの箱舟」をはじめとする世界各国の洪水神話に較べ、洪水の原因が説明されていないのが大きな特徴であると指摘し、洪水の原因がはっきり説明されているものとして、先ほどの「長者池説話」と、この「石仏、目赤くなると沈没する村」をその事例としてあげられている<sup>13)</sup>。沈んだ島伝説「石仏、目赤くなると沈没する村」の内容を紹介すればおよそ次のようになる<sup>14)</sup>。

<sup>11)</sup> 『韓国民族説話の研究』(一九四七年、乙酉文化社) 所収

<sup>12)</sup> 『韓国口碑文学大系—説話類型分類集』(一九八九、韓国精神文化研究院)

<sup>13)</sup> 「石仏、目赤くなると沈没する村」譚の洪水説話的性格と位相(『口碑文学研究』第六集、一九九八年、韓国口碑文学会)

<sup>14)</sup> 前掲注 11) 同書

I 今の広浦は小さな農村に過ぎないが、五百年前までの広浦は大都会であった。その時、広浦には浮浪放蕩な青年たちが多く住んでいた。 [悪人在住]

II その広浦にはある老婆が一人で小さな酒屋を経営していた。ある日、葛巾野服かつきんやふくをした一人の道僧が老婆の酒屋を訪ねてきて、饑渴を訴えながら飲食を請った。老婆は元々慈善な人であったので飢えている道僧を迎え、心を尽くして歓待した。道僧は飲食を済ませた後、所持した分銭がなかったので、食価は払えないと謝った。しかし老婆は元々食価をもらうつもりではなかったと言い、「飢えた人にご飯をおごつただけなのに何の代価が必要でしょうか」と、却って断りの言葉を述べた。 [道僧訪問と老婆の歓待]

III 道僧はしばらく立ったまま何かを考えてからこう言った。「今から三日間の糧食を準備して置き、あの山の上の墓前に立っている童子石像の目から血が流れたら、準備して置いた糧食を即時に持参して高い山の上に避難してください」と言って、知らないうちにどこかへ去ってしまった。 [道僧の返礼としての沈没予言]

IV 老婆は道僧の言う通り、すぐ糧食を準備して置いて、朝夕童子石像の目から血が流れるのかどうかを観察しに行った。そして浮浪な青年たちに会う度に、こうした話をしながら「君たちも避難の準備をしなさい」とアドバイスをした。 [沈没予言の確認]

V しかし悪小輩は老婆の話を知るところか、返って老婆を懲らしめてやろうと、夜密かに山に登って老婆の言っていた石像の目に赤い染料を塗って血の涙のように装い、翌日老婆にその事実を言った。 [悪人の悪戯の血塗り]

VI 老婆は顔面蒼白になり、慌てて糧食を持ってすぐ山の上に避難したので助かった。 [善人の避難と生存]

VII 悪小輩は自分たちの計略の素晴らしさを自賛しながら、老婆の酒樽を勝手に持ちだして乱飲大酔した。その時、津波が襲いかかり、一瞬の間広浦は海に変わり、それによって大都会であった広浦はすべて沈んでしまった。

[島沈没と悪人の懲罰]

VIII 今の広浦大河口は昔の広浦の沈没によってできたものであり、現在の広浦の里は沈没後に新しく建てられたものであるという。 [島の再建]

これは、昔大都会であった広浦は悪い青年たちが多く住んでおり、ある日一人の道僧がそこを訪ね、善良な老婆から歓待され、「石像の目から血が流れたら高い山に避難しなさい」と予言をした。しかし町の悪い青年たちはそれを信用せず、さらには赤い染料で石像を塗り、その結果町は沈没し、善良な老婆だけが生き残ったというものである。

この伝承は旧約聖書の「ノアの箱舟<sup>15</sup>」のように最初から広浦は若い青年たちによる悪に満ちた町として描かれており、そこを神様や仏様の存在として道士が訪ねることになっている。道士の訪問と善人を通しての町沈没の予言は、その悪を確認するためであり、それでもその予言を信じない悪者は死という結末を迎えており、町も沈没する。そして生き残った善良な老婆とその子孫たちによってその町は新しく再建されるということを主張しようとした伝承と考える。今まで採録された「石仏、目赤くなると沈没する村」の諸伝承をあげれば次の表の通りである。

<sup>15</sup> 月本昭男氏『旧約聖書□ 創世記』一九九七、岩波書店) 参照。内容は、①ヤハウェの神が見ると、地上には悪が蔓延り、神は地上に人を作ったことを悔やみ、心に痛みを覚えた。神は、「私は自ら創造した人を大地の面から拭い去ろう。人だけではなく獣までも、這う生き物までも、空の鳥までも、これらを作ったことが実に悔やまれる」と言った。 [地上の悪の蔓延] ②しかしノアは神の恵みを得た。神はノアに、「すべて肉なるものの終わりがわが前に迫った。彼らによって暴虐が地に満ちたからだ。よいか、私は地もろとも破滅させる」と告げた。 [神の沈没予言] ③神は、「あなたはゴーフエル材の箱舟を作りなさい。葦をもって箱舟を作り、内も外も瀝青を塗るがよい。あなたとあなたの家族全員は箱舟に入りなさい」と言った。ノアは神が命じた通りに行った。 [ノアの沈没予言実行] ④ノアが六百歳の時、大洪水が地を襲った。ノアは大洪水の水を避けて妻と、息子たちとその妻たちと共に箱舟に入った。動物、鳥などすべて生命のある中から二匹ずつ雄と雌がノアのもとにやってきたので船に乗せ、アラブトの山頂に着いた。ノア及び彼と共に箱舟にいた者だけが生き残った。 [ノア家族の避難と生存] ⑤大洪水は四十日間大地を襲い、水は百五十日間勢いを増し続け、地上を動き回る人や動物はすべて死んだ。 [町水没と悪人懲罰] ⑥百五十日が終わり、水は減り続けた。ノアは大地の面から

「石仏、目赤くなると沈没する村」の諸伝承

伝承地域	伝承の題名	調査者	所収文献	採録日時
①咸南・咸興	広浦伝説	孫晋泰	韓国民族説話の研究	1923. 8. 17
②咸北・名川	長淵湖	崔常壽	韓国民間伝説集	1940. 9
③京畿・議政府	石仏の血の涙	曹喜雄	韓国口碑文学大系 1-4	1980. 8. 28
④京畿・江華	天地浦のノッタリ	成ギヨル	韓国口碑文学大系 1-7	1981. 4. 24
⑤京畿・江華	ノッタリの話	成ギヨル	韓国口碑文学大系 1-7	1981. 5. 3
⑥京畿・江華	長池浦の話	成ギヨル	韓国口碑文学大系 1-7	1981. 7. 17
⑦京畿・江華	チョンジュポル 青銅橋	成ギヨル 金セフン	韓国口碑文学大系 1-7	1981. 8. 6
⑧京畿・江華	審判ノアの箱舟	成ギヨル 金セフン	韓国口碑文学大系 1-7	1981. 8. 11
⑨京畿・江華	チョンジブル伝説	趙東一他 3 人	韓国口碑文学大系 1-7	1981. 10. 8
⑩忠南・瑞山	牙山湾	任哲宰	韓国口伝説話 6	1973. 8. 27
⑪全北・益山	七山海	任哲宰	韓国口伝説話 7	1969. 8. 23
⑫全北・扶安	界火島	任哲宰	韓国口伝説話 7	1966. 5. 27
⑬全北・扶安	界火島の由来		韓国口碑文学大系 5-3	1982. 2. 6
⑭全北・全州	界火島の陥没来歴	崔来玉	韓国口碑文学大系 5-2	1980. 1. 31
⑮全南・新安	犬碑石の目に血が出て島 が減びる	崔ドクウォン	韓国口碑文学大系 6-6	1984. 5. 19
⑯慶南・晋陽	道士が教えてくれた井戸	劉ジョンモク・ ビンジェファン	韓国口碑文学大系 8-3	1980. 8. 9

以上の十六の「石仏、目赤くなると沈没する村」をモチーフ構成に沿って対照して示すと次のようである。

モチ ーフ	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	
悪人在 住	道僧訪 問と老 婆の飲 待	道僧の 返礼と しての 沈没予 言	老婆の沈 没予言の 確認	悪人の 悪戯の 血塗り	善人の避 難と生存	島沈没 と悪人 の懲罰	島の再 建	話型	
伝承地									

水がなくなったかどうかを確認するために鳥を放ったがすぐに戻ってきた。そこで鳩を放したが、同じように戻ってきた。七日後、再度鳩を放すと、鳩はオリーブの若葉をくわえて船に戻ってきた。さらに七日待って鳩を放すと鳩はもう戻ってこなかった。ノアは水が乾いたことを知り、家族と動物たちと一緒に箱舟を出た。ノアは神のヤハウェのため祭壇を築き、清い家畜、鳥を選んで全焼の供儀を行った。ヤハウェは二度とあらゆる生き物を打ち滅ぼすことはあるまい」と誓い、ノアとその息子たちを祝福し、その契約の印として雲の中に虹を置いた。大洪水後、ノアの息子たちから子供が生まれ、地上の諸族の始祖となった。〔始祖示現〕



①咸南	○浮浪放蕩な青年達	○老翁	○童子 石像の 目	○	○赤い 染色	(○)	(○) 津波		旅僧 予言 型
②咸北	(○)後出、村の意地悪の若者	○道士	○石仏 の目	○	○血色 のよう な赤い 水	(○)	(○) 天の崩 れる音 、湖		旅僧 予言 型
③京畿			○弥勒 の鼻、伝 説	○老翁だ けが信じ る	○村の 青年た ち、牛の 血	○老翁の み、山神 の旅助力	○大雨 の洪水、海		言 い 伝 え 予 言 型
④京畿	○妻は優しいが、夫はけち	○僧、水をあげる	○碑石の鼻、船の用意	○箱舟用 意	○意地悪者、犬の血	○妻	○皆死ぬ、大雨、湖	○橋掛の由来	旅僧 予言 型
⑤京畿	○村人皆が悪人	○空から降りてきた道僧、マッコリ	○亡夫石の鼻血	○	○犬の血	○老婆	(○) 大雨、山が流される	○橋掛の由来	旅僧 予言 型
⑥京畿	○村人の人情が悪くなる	○空から降りてきた天使の僧、一杯の小豆粥	○弥勒の鼻血	○老婆はすぐ村を離れ、ある青年が毎日確認	○村の青年たち、鶏の血	(○)	(○) 大雨、チョンソル里の沈没、湖		旅僧 予言 型
⑦京畿	○村人は金持ちだが無駄遣いが多い。けち、人情が悪い	○老僧、老僧を虐待				○心の優しい老婆だけ	○村人全員、雷・暴風雨、沈没	○お堂を作り老婆を祀る	旅僧 予言 型

⑧京畿	ノアの箱舟、水での審判という夢		○夢で <u>弥勒の鼻から鼻血水の審判</u>	○ <u>山頂に船を作り、避難準備</u>	○人々を騙そうと、鶏の血	○	(○) 雷・暴風雨、沈没、お堂建立、老婆祭祀	○お堂を作り老婆を祀る	神様・夢予言型
⑨京畿	○千戸のジョンピル村、お金持ち	○道僧(人間救済のため)、お金持ちは虐待、老翁は歓待	○弥勒の鼻から血	○毎日弥勒の地にのぼる	○鶏の血	○老翁は逃げる	○天災		旅僧予言型
⑩忠南	昔牙山湾はヨドルメと呼ぶ		○ <u>伝説として、英雄岩から血</u>	○毎日確認しに行く	○鶯鳥の血	○家族を連れて避難	○水没		言い伝え予言型
⑪全北	七山海は元陸地、徐氏の老人が住む	○地師、歓待	○ <u>仏の耳から血、海になる</u>	○毎日確認しに行く	○白丁による犬の血	○徐氏老人、県監、六房官属家族、塩売り)	○村人は全員死ぬ、雷、津波		旅僧予言型
⑫全北	界火島は昔陸地	不思議な人が通り過ぎる	○石仏の鼻から血	○朝夕確認、村人信じない	○村の若者、石仏の鼻に血	○老翁と七歳の孫だけ避難	○村人は全員死ぬ、雷、津波	○界火島由来	旅僧予言型
⑬全北	界火島は昔陸地	通り過ぎの過客	○石仏の鼻穴から血	○とても純朴な老翁、毎日確認、家族は避難反対	○村の若者、老翁を騙し、牛の血	○老翁と七歳の孫だけ避難	○村人は全員死ぬ。雷、津波	○界火島由来、老翁の孫は海南に行つて始祖	旅僧予言型

⑭全北	界火島 は昔陸 地	風水師	○石弥勒 の鼻 から血、 天地開 闢	○頻繁に 行って確 認	○村の 悪戯者、 牛の血	○老翁と 七歳の孫 だけ避難	○村人 は全員 死ぬ、 津波	○界火 島由来	旅僧 予言 型
⑮全北	小島に 神祀堂、 村人は 信心深 い	伝説を 老翁が 伝える	○犬形 の石碑 の目か ら血	○朝ごと に確認し に行く	○外部 の悪者、 財産ほ しさに 赤水	○悪者以 外は皆島 から避難	○悪者 は全員 死ぬ。 津波で 沈没		言 い 伝 え 予 言 型
⑯慶南		○道士、 僧、水を あげる	○石の 動物の 目から 血	○水汲み に行く度 に確認	○意地 悪の婦 女、鶏の 血	○婦女だ け	(○) 大水で 沈没?		旅僧 予言 型

次では上記の沈んだ島伝説「石仏、目赤くなると沈没する村」の諸本間の異同や特徴について検討してみたい。

**I 悪人在住**は、村の沈没の原因を提供する部分である。①～⑧の伝承は善良な老婆以外の者について、「村人は皆が悪人」「村の放蕩な青年たち」「村の意地悪者」「夫婦の中で妻は優しいが、夫はけち」「金持ちであるが、無駄遣いが多い」「派手な暮らしをし、その割にはけちで人情に乏しい」などと表現し、村人をあくまで悪人として設定して語るものが殆どである。⑨「審判ノアの箱舟」では、村の沈没の原因が神様による水の審判として語られており、「石仏、目赤くなると沈没する村」が洪水神話とも関連していることを示してくれる。

**II 道僧訪問と老婆の歓待**は、IVの「道僧の返礼としての沈没予言」と関わるものである。ここで道僧は予言を与え、それを信じない者を懲罰する神様や仏様の化身的存在として登場している。それがはっきり表れている伝承が⑤⑥で、道僧を空から降りてきた神様として認識している。沈没の予言をするのは道僧が優勢であるが、地師・風水師、道士、過客もある。筆者はこのように通り過ぎる旅僧が沈没予言をする伝承を①「旅僧予言型」と名付けることにしたい。韓国の殆どの伝承がこの「旅僧予言型」に属すると言える。

これに対して「旅僧予言型」を取らず、③⑩⑮の伝承は昔から村や人々の言い伝えとしており、筆者はこのようなパターンを②「言い伝え予言型」と名付けることにする。また⑧のみが夢での告げとなっており、これを③「神様・夢予言型」と名付けたい。

**III 道僧の返礼としての沈没予言**は、ほとんどの伝承に見られるものであるが、その血が流れる対象物としては、石像、石仏、石碑、亡夫石などと様々であるが、弥勒とする伝承も多くみられる。また、石像などの血が流れる個所としては、目と鼻の大きく二種類に分けられるが、殆どの伝承が眼(②⑮⑯)よりは弥勒や石仏の鼻としており、鼻とする伝承が優勢である。しかし、⑪の伝承のように耳とする伝承も存在する。

**IV 老婆の沈没予言の確認**は、善良で信仰心深い老婆が、毎日弥勒や石像の顔や目から血が流れているかどうかを確認しに行く伝承が多い。さらに沈没予言を深く信じ、避難の準備として④⑤の伝承は船を作ったりする。これに対して悪人たちはこの沈没予言を信じようとせず、かえって笑いや悪戯の種とするのが特徴である。

**V 悪人の悪戯の血塗**りは、犬、牛、鶏など動物の血を鼻に塗る伝承が多数を占める。しかし、①②⑮は朱(絵具)

を塗る「朱(絵具)塗り型」となっている。これ以外のすべての伝承は血を塗る「血塗り型」となっており、韓国では血塗り型が優勢であることがわかる。また、島の人々は善良で信仰心深い者として描かれているのに対して、外部から入ってきた者たちは悪人として位置付け、財産ほしさに悪戯の血塗りをする伝承(⑬)もある。筆者は石仏や弥勒の像(鼻)に血を塗る伝承が絵具を塗る伝承より古い形を残す伝承と見ている。雨を祈願する雨乞い祭では動物の血の付いた生首を石仏や神像に供えたり、川に投げたりする。この行為は神聖な神像や川を汚すことになり、これに神は怒って雨を降らせると認識されたのである。洪水や津浪によって村や町が沈没したというのはおそらくこの血塗りの要素と関わるものであろう。

**VI 善人の避難と生存**は、避難するのは道僧に選ばれた老婆だけとする伝承が多いが、老婆と孫と一緒に避難する伝承も多数を占める。これには善人の老婆と血が繋がる孫にその生命を継がせようとする意図がうかがえる。これは⑬の伝承のように孫が海南に行ってその始祖になったという伝承からもわかる。

**VII 島沈没と悪人懲罰**は、島や村が沈没するのは、津浪によるもの(⑪~⑬)と大雨によるものの二つに分けられるが、韓国の伝承はどちらかという大雨による水没とする伝承が優勢である。

**VIII 島の再建**は、VI「善人の避難と生存」と関わって、島と陸地を繋ぐ橋かけの由来を語る伝承(④⑤⑫⑬⑭)や、生存者の老婆が死んでから社を建てて祀ったとする伝承(⑮⑯)もあり、始祖示現や始祖祭祀の由来を語るものとしての性格が強く表れている。また⑬の伝承のように孫が海南に行ってその始祖になったという伝承も存在するのを見ると、日本の「瓜生島伝説」や韓国の「石仏、目赤くなると沈没する村」は洪水始祖伝説とも深く関わっていることがうかがえるが、直接始祖示現の事実に触れる伝承は殆ど存在しない。

#### 4. 韓国の沈んだ島伝説「石仏、目赤くなると沈没する村」の伝承様相

以上のように、韓国の沈んだ島伝説「石仏、目赤くなると沈没する村」は、西海岸に沿って北から南へと広範囲に渡って伝承されていることがわかり、海洋文学としての性格を有する。また伝承者も女性ではなく、男性である特徴を持つ。さらにその話型は、①「旅僧予言型」、②「言い伝え予言型」、③「神様・夢予言型」と分類ができるものであるが、次では韓国の沈没伝説を紹介しながらその伝承様相や日本の伝承との関わりについて詳しく論じてみたい。

まずは「旅僧予言型」に属するものであるが、北朝鮮の咸北地域には次の「長淵湖<sup>16)</sup>」の由来伝説が伝わっている。

昔、明川には長淵湖がなく、大きな村があったという。ある時、道士が旅の途中、とてもお腹が空いたのである所の食堂に入ってお飯をご馳走になり、ありがとうと挨拶をしてお金を払おうとした。しかし店の老婆は、「お腹が空いている人にご飯をご馳走しただけなのにどうしてお金をもらうことができるだろうか。私はあなたを助けただけでとても嬉しいです」と言って、お金をもらおうとしなかった。そこで道士は老婆に、「あなたにぜひ告げたいことがあります。この村の裏山に石仏がありますが、その石仏の目から血が流れたらすぐこの村を離れてください。その石仏の目から血が流れるとこの村は陥没し、大きな湖となるでしょう」と言って姿を消した。この話を聞いた老婆はその人がただの人ではないと悟って、翌日から毎日裏山の石仏の所に行って、その石仏を注意深く観察してから帰る日が続いた。さらに老婆は村の若者たちにも道士の予言を話し、「その石仏の目をよく観察しなさい」と言った。その話を聞いた村の悪戯な若者たちは、「石仏の目から血が流れるなんてそんな馬鹿なことがあるものか。またこの村が陥没して湖になるなんて正

<sup>16)</sup> 崔常壽『韓国民間伝説集』(一九八四、通文館)所収

気の沙汰ではない」といって嘲笑った。そして一人の若者が「あの老婆を一度酷い目に遭わせよう」と言って、血のような赤い絵具を持って行ってその石仏の目を赤く塗った。翌日、老婆が石仏の所に行くと、目から血が流れていた。老婆はびっくりして、「たいへんだ。石仏の目から血が流れているよ。早く非難しなくてはならない」と言って、すぐ裏山に走り上った。その様子を隠れて見ていた若者たちは嬉しそうに皆手を叩きながら笑った。その時いきなり天が崩れるような大きな音が聞こえ、あっという間にその村一帯は湖になってしまった。その湖が現在の長淵湖だという。

これは北朝鮮地域の咸北地域に伝承されるもので、長淵湖の地名の由来譚となっている。道士が旅の途中沈没の予言をするもので、前述の「旅僧予言型」に属するものである。また石仏の目に血のような「赤い絵具を塗る」となっており、筆者はこれを「朱（絵具）塗り型」と呼ぶことにしたい。これは後で詳しく述べる日本の沈没伝承に近い伝承と言えよう。

次は全北地方に伝わるもので、旅する地師が予言をする「旅僧予言型」の「七山海<sup>17</sup>」伝説を紹介する。これは徐氏の始祖由来を語るものである。

七山海はもと陸地で七つの村があったという。そこに徐さんという老翁が住んでおり、ある日一人の地師が訪ねて来たので手厚くもてなした。その地師は恩返しとして、「ここは間もなく海になるので早く非難した方が良い」と告げた。「その時がいつなのか」と聞くと、「大仏の耳から血が流れたら海になる」と答えた。老翁は毎朝、大仏の耳から血が流れるのかどうかを確認しに行った。村人は老翁があまりにも至誠を尽くして仏様に参るのでその理由を聞いた。老翁は、「大仏の耳から血が流れたら海になると地師の告げがあった」と答えた。その話を聞いた村人たちは「老翁はどうかしている」と嘲笑った。そのなかに犬を殺す白丁がいたが、手に付いた犬の血を仏さまの耳に塗って帰ってきた。翌朝大仏の鼻から血が流れるのを見た老翁は村人に、「ここはすぐ海になるから早く避難しろ」と大きく叫んで山に登った。しかし老翁に付いて行く者は誰もいなかったが、村の県監だけは老翁の言葉を信じ、部下たちを連れて山に避難した。老翁は途中で、塩売りに遭ったが、「ここまでは津波が来ないのでこれ以上は登る必要がない」と言ったのでそこで留まった。すると大きな雷の音が聞こえ、塩売りが言った所まで津波が押し寄せた。七山村で生き残った人は徐氏老翁とその家族、県監家族とその部下、塩売りだけで他の人は皆死んでしまった。この徐氏の子孫は今でも忠清道にたくさん住んでいるという。

以上のように七山海はもと陸地で七つの村があり、そこには徐老翁が住んでいた。彼は地師の予言を信じ、充実に予言を守った人であった。津浪が押し寄せても徐氏の家族は生き残り、今の忠清道地域には彼らの子孫が住んでおり、その他は皆死んでしまったことを述べる。これは徐氏の始祖由来を語っているもので注目される。また、大仏の耳に犬の血を塗ったということで「血塗り型」に属するが、「大仏の耳からの血が流れたら沈没」というのはきわめて珍しい伝承である。後で取り上げる日本の瓜生島型伝説の諸伝承の中には、瓜生氏の始祖由来を語る津浪伝説が存在するが、これとの関連で注目すべき伝承である。また動物の殺害に関わる白丁を悪人として位置付けているのもこの伝承の特徴である。白丁は高麗時代には広範囲に存在していた農民を指す言葉であった。それが朝鮮時代に入り、賤民の身分の一つとして家畜を屠殺する屠殺業者を意味する言葉として使われ、彼らは過酷な差別を受けた。朝鮮時代の身分制度は細分

<sup>17</sup> 任哲宰『韓国口伝説話 全羅北道編Ⅰ』七（一九九〇、平民社）所収

化され、高麗時代よりも複雑になり、大きく国王、兩班、中人、常人、賤民に分けられたが、この中で白丁はムーダン（巫覡）と一緒に最下位の賤民に属していた。また白丁は甲午改革（一八九四年）によって法律上は白丁の身分からは開放されたが、その差別はすぐ消えるものではなかった。白丁は当時四十余万が存続し、集団をなして村を形成しており、一般の人との交流も避け、階級内婚を行った<sup>18</sup>。韓国の沈んだ島伝説において白丁が登場し、彼を悪人として描くのはこうした当時の身分制度の反映であると言えよう。

上記の「七山海」伝説は村に津浪が押し寄せて村が沈没するものであるが、次の京畿地域の「石仏の血の涙<sup>19</sup>」は津波ではなく、大雨の洪水によって村が沈没するものである。

慶州に恩津<sup>うんじん</sup>弥勒があったが、その弥勒の鼻穴から血が出るという災難が起こるといふ言い伝えがあった。その村の老翁がその話を信じて毎日見に行った。あまりにも熱心に通うので村の青年たちは、「老翁を懲らしめてやろう」と、牛を殺して牛の血を持って来て、弥勒の鼻に塗って置いた。老翁は息子たちに「もう来るものが来た。恩津弥勒の鼻穴から血が出るという災難が起こるといふ言い伝えがあるが、もうその時期が来たので農機具を全部売ってどこかへ避難しよう」と言った。すると息子たちは、嘲笑いながら、「お父さんはそれを信じていますか？ 誰々がお父さんを懲らしめてやろうと牛の血を塗って置きましたよ」と答えて、信じようとしなかった。さらにお父さんは、呆け始めたときまで言った。すると老翁は、「お前たちよ、もし行きたくなければ私一人でも避難するよ」と言って山を登り始めた。途中道に迷うと山の神が現われ道案内をしてくれ、無事に山の頂上に着いた。老翁はそこで寝ていたが、ノアの箱舟の洪水のように大雨が降り始め、その村は海になり皆流されてしまった。老翁一人だけ残り、皆溺れ死にした。

上記は恩津弥勒の鼻穴から血が出ると災難が起こるといふ言い伝えがあったということで、沈没の予言は昔からの「言い伝え」としており、そういう意味で「言い伝え予言型」に属するものである。また牛の血を塗るので「血塗り型」に属する。さらには沈没予言を村の青年たちだけでなく、老翁の息子たちも信じなかったとなっている。「ノアの箱舟の洪水のように大雨が降り続け、その村は海になってしまった」と、津波ではなく大雨の洪水による洪水説話となっており、ノアの箱舟伝承の同類として認識され、語られている。信心深い老翁一人だけ残り、信じなかった皆は溺れ死にしたとあり、洪水始祖神話としての性格を保持している伝承と言えよう。韓国の伝承は津浪による町の沈没の伝承もあるが、洪水による沈没伝説が主流をなしている。この点は後で述べる、津浪や地震による沈没とする日本の伝承と相違している。

次は韓国全北地域に伝承される「犬の碑石の目から血が出てきて島が亡びる<sup>20</sup>」のものであるが、島沈没の原因を村以外のよそ者とする点で注目される伝承である。

昔、ある小さな島に七〇～八〇戸の人口が住んでいた。その島には神社があり、その中には犬の碑石が祀られていた。島の人は皆その神社に参り、犬を拝み、犬の目を見て降りて来た。ある人がその理由を聞くと、「この島の昔からの言い伝えとして、犬の目から血が出ると島が沈没し、皆避難しなければいけない」と言った。ある日、島の海を通る船が転覆し破損し、溺れている外部の泥棒を助けた。島の人が神社の犬を深く信仰し毎日目を確認しているのを見た外部の泥

<sup>18</sup> 福田晃・金贊會・百田弥栄子『鉄文化を拓く炭焼長者』（二〇一一、三弥井書店）の拙考「炭焼長者への招待（韓国の「炭焼長者」）」

<sup>19</sup> 『韓国口碑文学大系』1-4（韓国精神文化研究院）

<sup>20</sup> 『韓国口碑文学大系』6-6（韓国精神文化研究院）



韓国忠清南道論山市の恩津弥勒菩薩（出典：「金ギュボンの暮らしの話」より）

棒たちは、「犬の目に赤の絵具を塗ったら、皆島から逃げるだろう。その時島の食糧や島民の財産を持ちだそう」と打ち合わせをした。そして島民が寝る時、神社の犬を絵具で赤く塗った。翌朝、赤い犬の目を見た島民たちは大騒ぎし、島から皆逃げた。泥棒たちは島のお金持ちの家から酒を取り出して飲んだり踊ったりし、もう泥棒はしなくてもよいと大喜びした。その時、津波が島に押し寄せ、泥棒たちは皆死んでしまった。

これは、昔からの島の言い伝えとして、神社の石碑の犬を深く信仰する島民は善良な人たちとして描いている。しかし外部から入って来た泥棒たちが泥棒の目的で犬の目を赤く塗ったため、島は沈没し悪人たちも皆死んでしまった。このようによそ者を悪人扱いする設定は、後で論じる『豊後伝説集』の大分の瓜生島伝説でも、渡来人の良齋が神像を丹粉で赤く塗る趣向に類似している。よそ者を悪人とし、島の信仰を守ろうとする姿勢がうかがえる。

また、韓国の京畿地方では島沈没伝説が洪水神話に属することを推測できる「審判ノアの箱舟<sup>21</sup>」が伝承されている。

ノアの箱舟の話を知ったことがあるが、それについて語ろう。ある両班が「弥勒の鼻から血が流れたら水による審判の日だ」という夢を見た。両班はそれ以降、山の頂上で三年間かけて船を作り始めた。そして家財道具をそちらに移した。それを見た人々は「あの人、どうかしたんじゃない？ 山頂に何故船を作って置くのか」と、両班の行為を嘲笑った。その晩、たくさんの人が集まって両班を騙そうと、「弥勒の鼻から血が流れたら、水による審判だと信じているから、私たち一緒に弥勒の鼻に鶏の血を塗ろう」と言って、その通りにした。それから雨が降り出したので、両班は船を浮かせ避難した。最後に飛ばした鳥が帰ってこなかったので「もう陸地は水が引いた」と安心した。

上記は、鳥の血を塗っているので「血塗り型」に属するが、「弥勒の鼻から血が流れたら水による審判の日だという夢を見た」というノアの箱舟のことを引きながら伝承者が語っている点が注目される。ノアの箱舟は地上に人間が多く

<sup>21</sup> 『韓国口碑文学大系』1-7（韓国精神文化研究院）

なり、人の間に悪がはびこりはじめていたのを見た神のヤハウェは後悔し、大洪水で全滅させようとする。しかし、善人であるノアだけは助けようと思ひ、船を作って、ノアとその家族、動物たちをそれぞれ雌雄二匹ずつ載せて、大洪水から救助する。生き残ったノアの息子たちから子供が生まれ彼らは諸族の始祖となったというものである。韓国の沈没伝説はこうした洪水神話に属することが推測でき、上記の伝承は最初に取り上げた韓国の洪水神話のように始祖神話としての性格が濃厚である。実際に韓国の沈んだ島伝説がこのようなノアの箱舟として認識され、語られていることは沈んだ島伝説が洪水始祖神話と深く関連していることを示すものであろう。さらに「鳥を飛ばして陸地から水が引いたのかどうかを確認する」のも、ノアの箱舟に見られるモチーフであるが、この説話の洪水神話としての性格がよく反映されたものと言える。

以上のように、韓国の瓜生島型沈没伝説の「石仏、目赤くなると沈没する村」は、様々なバリエーションを持って伝承されるものであるが、およそ予言の方式から、①旅僧予言型、②言い伝え予言型、③神様・夢予言型の三つに分類できるものであった。また神像や石仏に物を塗る形式として分類するなら、①動物の血塗り型、②絵具(朱)塗り型の二つが存在し、それらはまた次にあげる中国伝承や日本の「瓜生島伝説」とも深く関連するものであった。

## 5. 中国の沈んだ島伝説

中国に目をやると、日本の「瓜生島伝説」と韓国の「石仏、目赤くなると沈没する村」ときわめて類似する沈んだ島伝説が四世紀中頃の成立とされる『搜神記<sup>22</sup>』に記されている。

- ① 由拳県(浙江省)は、秦代の長水県である。始皇帝のとき、この地方に、「お城のご門が血によごれ、お城は沈んで湖になるぞ」という童歌が流行った。 〔童歌予言〕
- ② 一人の老婆がこれを耳にして、毎朝城門の様子をさぐりに出かけた。 〔沈没予言確認〕
- ③ 門衛の隊長が怪しんで縛ろうとしたので老婆はわけを話した。その後、隊長は犬の血を城門に塗りつけた。 〔隊長の血塗り〕
- ④ 老婆はその血を見るなり逃げ去った。 〔老婆の避難〕
- ⑤ しかし、急に大水が出て、県城は水に浸かってしまいそうになった。この時、主簿の幹という者が知事のところで報告に行くと、知事は言った。「その方はなぜ魚になってしまったのだ。すると幹も、「知事閣下も魚になっておられます」と言ったが、町はそのまま沈んで、湖になってしまった。 〔県城沈没と悪人懲罰〕

これは「お城のご門が血によごれ、お城は沈んで湖になるぞ」という童歌<sup>わさうた</sup>が流行ったとある。この沈没伝説は先ほど検討した「言い伝え予言型」に属するものであるが、童歌として誰が作ることもなく世に現れて流行したというのが面白いところである。しかし韓国のシャーマンの神や宇佐神宮の八幡神のように、神様は童子の姿でよくその姿を見せたりもし、そういう意味で童子の歌う童歌は聖なるものであり、日本の沈んだ島伝承において昔からの言い伝えとして語られる「言い伝え予言型」とはその趣向がやや違うかも知れない。また「隊長が犬の血を城門に塗りつけた」とあることから「動物の血塗り型」にも属する。また「隊長は犬の血を城門に塗りつけた」とあるだけで、他国の伝承に見える悪戯としての血塗りのなにかどうか明記されていない。さらに目ではなく、犬の血を城門に塗りつける叙述となっており、特に目や鼻にはこだわっていないのが特徴である。

この「言い伝え予言型」に対して旅の書生が予言をする伝承が『淮南鴻烈解<sup>23</sup>』巻二に伝わっている。

<sup>22</sup> 「城門の血」(『搜神記』巻13-8、通巻326話、竹田晃訳『搜神記 東洋文庫10』一九六四、平凡社)所収

<sup>23</sup> 前漢の『淮南子』の注である後漢(九四六~九五〇)時代成立の『淮南鴻烈解』巻二



- ① 歴陽（現、安徽省和県）の老婆が旅の書生を手厚くもてなした。〔旅の書生訪問と老婆の歓待〕
- ② その書生は「この県の城門の敷居の石にもし血が付いていたら急いで山に登れ。ここは陥没して湖になるであろう」と教えてくれた。〔書生の返礼の沈没予言〕
- ③ 言われた通り老婆は石敷居を調べる。〔老婆の沈没予言の確認〕
- ④ わけを聞いた門番が面白半分に鶏の血を塗り付けて置いた。〔門番の悪戯の血塗り〕
- ⑤ すると本当に国が沈んで湖になってしまった。〔町沈没〕
- ⑥ 老婆は山に逃げて無事だったという。〔老婆の生存〕

この伝承は旅する書生が予言するので「旅僧予言型」、門番が面白半分に鶏の血を塗るので「血塗り型」に属する。しかし門番は面白半分で悪戯として血塗りをしたという叙述だけで彼は悪者なのかどうかの記載がないのも特徴である。ここで血塗りの場所は顔や目ではなく「城門」となっており、前述の『搜神記』巻13-8の「城門の血」の伝承に近い。これに類似した伝承は、齊の『述異記上<sup>24</sup>』にも見える。

上記の二つの伝承は血を塗る場所が「城門」であり、韓国や日本によく見える鼻や神像の顔ではないが、次の伝承は子供が老婆を騙してやろうと亀の目玉に朱を塗りつけたとなっており、目にこだわる伝承も存在することがわかる<sup>25</sup>。

- ① むかし巢県（安徽省）に、揚子江の水が堰を切って流れ込んだことがあった。やがて水が引き、もとの河道に戻ったが、後に残った水だまりに、重さ一万斤もあろうかという巨大な魚がいて、三日経って死んだ。郡民一同これを食べたが、一人の老婆だけは食べようとしなかった。〔巢県の洪水と老婆の龍神信仰〕
- ② すると不意に老人が現われ、その老婆に向かって、「この魚はわしの息子だったのじゃ。運悪くこんな災難に遭ってしまったが、お前だけは食べようとしなかった。わしはお前にたっぷり礼をしてやろう。良いか、もし町の東の門のところにある亀の石像の目が赤くなったら、この町は必ず陥没するのだぞ」と言うのであった。〔老人の返礼の沈没予言〕
- ③ 老婆はそれ以来、毎日門まで調べに出かけた。〔老婆の沈没予言の確認〕
- ④ 町の子供がそれを見て不思議に思い、わけを尋ねるので、老婆は隠さずに話してやった。すると子供は老婆を騙してやろうと、亀の目玉に朱を塗りつけた。〔子供の悪戯の朱塗り〕
- ⑤ 老婆はそれを見るなり、慌てて町から逃げ出したが、そこへ青い着物を着た子供が現われて、「僕は竜の子だ」と告げ、老婆の手を引いて山に登った。〔竜の助けと老婆の避難〕
- ⑥ やがて町は陥没し、湖になってしまったのである。〔町陥没〕

この伝承は、「神様・夢予言型」「朱塗り型」に属するもので、「朱塗り型」は日本の「瓜生島伝説」に多く見られるものでその関連が目玉される。また朱を塗りつける場所は目である。しかし、旅僧が老婆の家を訪ねて歓待を受け、その返礼として沈没予言をするものとなっており、この要素を重視すると「旅僧予言型」に近いと言えよう。おそらく「神様・夢予言型」から「旅僧予言型」に変化していく過渡期的な伝承であることが考えられる。また子供が老婆を騙そうとして朱塗りをするにも関わらず、「最後に町は陥没し、潮になってしまった」と述べるだけで、子供についての懲罰は語られていないのが特徴である。おそらく子供の悪戯は寛大な心で許してやろうとする心理が働いているのであろう。また老婆の避難を助ける者として青い着物姿の龍の子をあげているのもこの伝承の特徴と言える。こうした中国や韓国の伝承は、次に取り上げる日本の沈んだ島「瓜生島伝説」とその源流を同じくするのは間違いのないことであろう。

<sup>24</sup> 前掲注2) に日本語訳文が記載されている。

<sup>25</sup> 「竜の恩返し」(『搜神記』巻20-7(通巻455話)、竹田晃訳『搜神記 東洋文庫10』一九六四、平凡社)所収

## 6. 日本の沈んだ島「瓜生島伝説」

次には日本の沈んだ島「瓜生島伝説」の諸伝承を紹介し、韓国の沈没伝説「石仏、目赤くなると沈没する村」との比較を試み、その伝承の特徴や管理者などについて考えてみたい。まず、沈んだ島「瓜生島伝説」の内容を紹介すればおよそ次のようである<sup>26</sup>。

- I 昔、此の島には鎮守の神として蛭子神社<sup>えびす</sup>があって、島に居住する漁民たちの信仰的となっていた。  
〔島の蛭子神社信仰〕
- II 昔から此の社の神体なる蛭子像の面色が赤くなる時は、やがてこの島の滅亡する時であると伝えられていた。  
〔言い伝えの沈没予言〕
- III 信心深い島の人は毎日蛭子神社<sup>えびす</sup>に行つて蛭子像の面色が赤くなっているかどうかを確認した。  
〔沈没予言確認〕
- IV 或る時血気盛んな若者が悪戯心を起こして、その像の面を赤々と朱を塗りつけて人々を驚かそうとした。  
〔若者の悪戯の朱塗り〕
- V それを見た島人は大いに愕き恐れて、言い伝えを信ずる者は皆家財を纏め家族を引き連れて、対岸府内の方面に遁れ助かった。  
〔信仰者の避難と生存〕
- VI 幾もなく天地鳴動して大津浪が押し寄せ、此の島を跡形もなく呑み込んでしまい、一夜にして渺茫<sup>びょうぼう</sup>たる海岸となつてしまった。  
〔島沈没と悪人懲罰〕
- VII この時対岸の扇山<sup>すべ</sup>が迂り下りて、それを押し退けながら鶴見山<sup>つるみ</sup>が雄姿颯爽と現れ出た。その後平穩に帰してから、流失した蛭子社は新しく沖の濱に祀られ、又島にあった威徳寺も移されて沖の濱に建立された。そして瓜生島から漂着した松樹<sup>いとし</sup>一株が威徳寺の庭に植えられたが、その樹が今その寺の庭一面<sup>おお</sup>を蔽う程の名松となつたのである。  
〔寺の再建〕

以上は、最初から蛭子神社<sup>えびす</sup>があり、そこは漁民たちの信仰的になっていたことを主張しており、これは島の住民たちは皆善良な人間であつたことを示唆するものと言える。また昔から蛭子像の面色が赤くなる時は、やがてこの島の滅亡する時であると伝えられていたとしており、話型としては「言い伝え予言型」に属する。しかし血気盛んな若者が悪戯心を起こして赤々と朱を塗りつけて島は沈没したとあり、動物の血を神像に塗る伝承と違っているので、「絵具(朱)塗り型」に属する。また扇山と鶴見山の地名由来を語り、大分の伝説としての特色が見られる。また新しい蛭子社や威徳寺の再建由来やもと瓜生島にあった松樹一株が漂着し、威徳寺の庭に植えられたことも語られており、寺の由緒の深さが主張されている。

### 沈んだ島「瓜生島伝説」の諸伝承

管見し得た沈んだ島「瓜生島伝説」の諸伝承には、次のようなものがある。

- ①大分県「沈んだ島の話」(市場直次郎『郷土趣味雑話』、1932年11月20日、金洋堂書店)
- ②大分県「瓜生島」(市場直次郎『豊後伝説集』1931年、郷土史跡伝説研究会、荒木博之編、宮地武彦・山中耕作『日本伝説大系』第13巻、1987年3月所収)
- ③大分県別府市「沈んだ島」(土屋北彦『日本の民話 49 大分の民話』未来社、1972年8月)

<sup>26</sup> 大分県「瓜生島」(市場直次郎『豊後伝説集』一九三一、郷土史跡伝説研究会。荒木博之編、宮地武彦・山中耕作『日本伝説大系』第13巻 北九州編、一九八七)所収

- ④大分県別府市「海に沈んだ島」(梅木秀徳・辺見じゅん『日本の伝説 49 大分の伝説』、1980年8月)
- ⑤大分県「久光島の流没」(市場直次郎『郷土趣味雑話』、1932年11月20日、金洋堂書店、荒木博之編、宮地武彦・山中耕作著『日本伝説大系』第13巻 北九州編、1987年3月20日所収)
- ⑥大分県速見郡「島山と碓岩の由来」(大分県教育会『大分県郷土伝説及民謡』、1931年6月、荒木博之編、宮地武彦・山中耕作著『日本伝説大系』第13巻 北九州編、1987年3月20日)
- ⑦大分県速見郡「瓜生島に絡まる伝説」(大分県教育会『大分県郷土伝説及民謡』、1931年6月)
- ⑧大分県「瓜生島陥没伝説」(市場直次郎『郷土趣味雑話』、1932年11月20日、金洋堂書店) 荒木博之編、宮地武彦・山中耕作著『日本伝説大系』第13巻、1987年3月所収)
- ⑨長崎県南松浦郡久賀島「高麗島伝説」(『五島民俗誌』、荒木博之編、宮地武彦・山中耕作著『日本伝説大系』第13巻、1987年3月所収)
- ⑩長崎県下県郡美津島町「島の沈む日」(稲田浩二・小沢俊夫『日本昔話通観 第24巻 長崎・熊本・宮崎』、同朋社、1980年2月5日)
- ⑪徳島県「小松島市のお亀磯」(武田明『四国路の伝説』、昭和47年11月30日)
- ⑫新潟県西頸城郡名立町(小山直嗣『越佐の伝説』、野島出版、昭和51年5月)
- ⑬静岡県小笠郡大東町「地蔵の顔が赤くなる日」(稲田浩二・小沢俊夫『日本昔話通観 第13巻 岐阜・静岡・愛知』、同朋社、1980年11月10日)
- ⑭鹿児島県「薩州野間御崎明神」(『本朝故事因縁集』巻五、京都大学文学部国語学国文学研究室『京都大学蔵 大惣本稀書集成』第八巻、臨川書店、1995年9月所収)

以上の沈んだ島「瓜生島伝説」の諸伝承をモチーフ構成に沿って対照して示すと次のようである。

モチーフ 伝承地	I 島の 蛭子神 社信仰	II 言い伝え の沈没予 言	III 沈没予言 確認	IV 若者の悪 戯の朱塗 り	V 信仰者の 避難と生 存	VI 島沈没 と悪人 懲罰	VII 寺の再建	話型
①大分	○蛭子社、漁民たちの信仰的	○蛭子像の面色が赤		○血気旺盛な若者・ <u>像の面を朱塗り</u>	○大津波、言い伝えを信ずる者は対岸府内に避難	○	○蛭子社と威徳寺の再建。扇山、鶴見岳の地名	言い伝え 予言型

②大分	○恵比須社	○神像の顔が赤。社参詣して無事祈願	○朝夕に参詣して無事を祈願	○按摩、渡来人・ <u>神像の顔を紅殻塗り</u>	○津浪、船に乗って本土。島に残る者有り。慶長元年	○	○蛭子社と威徳寺の再建。瓜生多喜枝氏口述、始祖神話性格	言い伝え 予言型
③大分	瓜生島、大久光島、小久光島、東住吉島、松島など。勝忠は信仰深い人	○蛭子社の神将が真っ赤。 <u>南都の僧都、行恵が勸進に島に来る。</u>		○島の南西端に住む加藤良斎という医者・ <u>蛭子社十二神将の顔を丹粉塗り</u>	○地震と高潮、島人は船に乗って避難。波に吞まれた勝忠は助けられる。	○島沈没。生存七人、行方不明数知れず、溺死者七百余		言い伝え 予言型→ <u>南都の僧の訪問は旅僧予言型に結び付く。</u>
④大分	瓜生島、大久光島、小久光島、島長幸松殿は信仰深い人	○蛭子社の木彫りの蛭子さんの顔が真っ赤		○島の南西の端に住む良斎という医者（渡来人）・ <u>蛭子さんの顔を丹粉塗り</u>	○地震と高潮、気の早い人は船で大分、日出町に避難。良斎は沈没。蛭子さんの近くの爺と婆は助けられる。	○島沈没。生き残った者は僅か	○瓜生島の威徳寺第六代周安が現在の威徳寺を再建。仏崎に本尊の阿弥陀如来像や寺の文書が流れ着く。島、家が別府湾に眠っている。	言い伝え 予言型
⑤大分	○地藏尊	○地藏尊の顔が赤	慶長元年瓜生島沈没	○誰かの悪戯・ <u>地藏尊像の顔に丹塗</u>	○大地震、本土。島に残る者有り	○慶長三年久光島沈没		言い伝え 予言型

				り				
⑥大分	○弁財天社、島山と碓島地続き	○弁財天社の石像の顔が赤。	○村人毎日石像を覗く	○村の若いならず者・石像の顔に色塗り	○大地震、豊岡の住民は皆避難	○	碓岩は島山の先端部分、鶴見岳・由布岳の爆発	言い伝え 予言型
⑦大分	○弁天様、若い男女の恋(悪)、長雨が続く。	○弁天の像に朱色の絵具を塗ることなどを綺麗な姫二人が告げる。	弁天様に朱を塗ることを忘れた	○若い男女カップル・弁天様に朱塗り	○津浪、お越や別府の対岸	○若い男女は沈む。	○太田の濱の沖に碓島の岩、大干潮の死んだ男女のため神楽を舞う。	神様・夢 予言型
⑧大分	一遍上人諸国巡錫中別府上人が鼻に上陸。 <u>地獄の惨状</u> (噴錫噴気孔)経石で埋めの功	○上人の刻んだ <u>仏像の鼻</u> が赤になると災難がくると、上人が予言。				○慶長元年の瓜生島沈没時に仏像の鼻が赤くなったと記すノミ		旅僧予言型
⑨長崎	○高麗島の祭神	○島の祭神が夢枕に立って予言。余の顔色が変わったとき		○島民の中の心善からぬ者・祭神の顔に赤塗り	○船を用意して避難	○	宮田に持ち出した祭神を祀る。高麗水飲用、子孫の高麗焼の茶碗秘	神様・夢 予言型

							蔵。始祖神 話として の性格	
⑩長崎	○村の お地藏 様	○き三郎 が言う・ 地藏様の 顔が真っ 赤	○地藏様 を毎日参 詣	○皆が馬 鹿にし て、 <u>お地 蔵さんの 顔に何か を塗って 真っ赤</u>	○船に地 蔵様を載 せて平戸 のどこか に避難	○		<u>※地藏様 信仰のき 三郎→神 様・夢予 言型に近 い。</u>
⑪徳島	○お亀 磯の岩 礁、 <u>えび す社に 鹿の頭 を祀る。</u>	○夢の告 げ・えび す様の鹿 の顔が真 っ赤	○信心深 い老婆毎 日参詣	○若衆・ <u>鹿の顔に 紅殻塗り</u>	○家族皆 船に乗っ て避難	○大き い地鳴 りして 沈む。	○お亀磯 の一部だ け突き出 る。	<u>神様・夢 予言型</u>
⑫新潟	五郎兵 衛、 <u>お仲 夫婦(悪 人)、娘 (善人) として 登場</u>	○旅の旅 僧が通り かかり予 言・空が 真っ暗に なり海が 真っ赤	○五郎兵 衛は信じ なく、お 今は信じ て旅僧に 手を合わ せる。		○お今だ け逃げて 無事	○大き な音、裏 山が真 二つに 割れ海 に押し 出され る。		<u>旅僧予言 型→言い 伝え予言 型に近 い。</u>
⑬静岡	地藏を 信仰し ている 男	○男が地 蔵様の告 げとし て・地藏 の顔が赤		○青年た ち・ <u>地藏 の顔に赤 い絵具塗 り</u>	○男だけ 避難	○泥の 海にな る。		<u>地藏様信 仰の男→ 神様・夢 予言型に 近い。</u>
⑭鹿兒 島		○仁王の 面が赤		悪人・仁 王の顔を 朱塗り		○島沈 没、人は 皆溺れ 死ぬ。	薩州野間 の庄の松 尾明神に なり舟守 護	

上記の沈んだ島「瓜生島伝説」をモチーフ構成に沿って諸本間の異同や特徴について検討してみたい。

**I 島の蛭子神社信仰**についてみると、その信仰対象の社は蛭子社、弁天様、地藏尊などになっているが、そこは住民たちの信仰的になったり、信心深い一人の老婆が毎日参詣したりすることとなっている伝承が優勢である。しかし、⑩の伝承は最初から五郎兵衛、お仲夫婦とその娘を登場させ、夫婦は悪人、娘は善人と位置付け、旅僧の予言に対しても娘だけが信じて手を合わせたというふうになっている。これは韓国の伝承①などにも見えるもので、最初から村人を悪人として規定する伝承に近い。⑧の大分別府の伝承において一遍上人が猛烈に吹きあがる温泉の噴湯噴気孔をみて「地獄の惨状」を思い、それを経石で封じ込めたとあり、「悪人」のモチーフが「地獄の惨状」に譬えられて語られた伝承である。後は単にその土地の地名、島や山などをあげ、最後のⅦのところと関わって地名などの由来を語るものとなっている。

**II 言い伝えの沈没予言**では、蛭子像や仏像の面（顔）が赤となると村などが沈没するという伝承が主流をなしている。しかし、神像などの顔を言わずに、蛭子社の神将が真っ赤になると島が沈没するという伝承（③）や、弁天の像に朱色の絵具を塗るのを忘れるなど夢の中でお姫様二人が告げており、それによって村を沈没させるもの（⑦）もあり、特に顔にはこだわっていない。また⑧の伝承では一遍上人が自分の刻んだ仏像の鼻が赤くなると災難が起こるといって鼻にこだわっている点は、韓国の伝承において、「弥勒の鼻」にこだわっている伝承に近い叙述である。予言の方式からみれば、①②③④⑤⑥の伝承は「言い伝え予言型」に属しており、特に大分の伝承によく見られるものである。また⑦⑨⑩⑪⑬の伝承は「神様・夢予言型」に属しており、大分以外の伝承で多く見られるものである。これ以外の⑧⑫の伝承は「旅僧予言型」に属しており、この伝承は韓国の伝承によく見られるもので日本の伝承では優勢ではない。

**III 沈没予言確認**は、②⑥⑩⑪⑫の伝承だけに見られるものである。これは老婆や神の予言を信じている人々の信仰の深さを再確認する思想でもあるが、韓国の伝承より日本の伝承は沈没予言確認が少し後退したものとなっているのが特徴である。

**IV 若者の悪戯の朱塗り**において、神像などに朱塗りをするのは、血気旺盛な若者、若い男女カップル、島民のなかで心善からぬ者、若衆、青年たち、悪人など様々な形で表れている。③④の伝承では瓜生島の南西の端に住む良齋という人物をあげているが、島の中心部ではない南西の端という外れた地域を叙し、悪人としての良齋のことをアピールしたものと見られる。さらに神像などに朱塗りをした者を按摩という渡来人とする伝承（②）もあり、その按摩と善良な島人とを対比させ、島中を聖なる世界、外を穢れの世界と位置付ける思想がうかがえる。これは大分の伝承だけではなく、韓国の伝承にも見られるものであった。前述した韓国の伝承では、「血塗り型」が優勢であるが、上記で見たように、日本の伝承はすべてが「朱（丹・絵具）塗り型」となっているのが特徴である。また日本の伝承は、⑦の弁天様に朱塗りをする伝承以外はすべてが顔に朱塗りをするものとなっており、顔にこだわっている伝承が主流となっている。これに対して韓国の伝承は、弥勒仏の鼻に血塗りをする伝承が中心となっており、この違いは今後究明すべき重要な課題である。

**V 信仰者の避難と生存**は、善良な者が避難して助けられたかどうかまでは記されていない伝承もあるが、善良で信仰深い者、その周りの者が避難して助けられたことを述べるものである。これはほぼすべての伝承に見られる。また避難の手段としては、③⑨⑩⑪の伝承は船に乗って島や村を離れることになっており、ノアの箱船のような洪水始祖神話と韓国の伝承にも善人が船に乗って避難する記述があり、両者の関連が注目される。

もう一つ日本の伝承の大きな特徴としてあげられるのは、村や島沈没の形態が韓国の伝承や世界の洪水神話に見られ

るような大雨による洪水ではなく、大津浪や大地震によるという点である。②③⑤⑧の大分の瓜生島伝説は、実際に史実として発生した慶長元年の大地震やそれによる津波のこと、鶴見岳や由布岳の噴火のことまでが語られており、瓜生島伝説の史実化がさらに進められた伝承と言えよう。このように日本の瓜生島伝説では、韓国や中国、そして世界の洪水神話の核心要素とも言える大雨による洪水モチーフが完全に姿を消し、大地震による大津浪へ変貌をとげて語られており、中国・韓国と始原は同じくしながらも、地震大国・日本の伝承としての特色を保持していると言える。

**VI 島沈没と悪人懲罰**では、大津波が島に押し寄せ沈没し、その際に悪人は皆海に沈んで死んでしまったことを語る。③の伝承は島の沈没により生存者はわずか七名しかなく、行方不明者は数えきれず、溺死者は七百余人と、具体的にその数字まであげながら語られており、伝説的特色を保持する。④の伝承は、気の早い人は大分、日出町まで避難したとあり、悪人の良齋は沈没してしまっただけで、ただ蛭子さんの近くに住んでいた信仰深い爺と婆だけは加似倉山に打ち上げられ助かったと、蛭子神を信仰した者への加護が強く主張されている。

**VII 寺の再建**は、すべての伝承に見られるものではないが、①②④は瓜生島にあった威徳寺を大分勢家の地に再建復興したことが叙述される。④の伝承では瓜生島の威徳寺第六代周安の夢枕に僧が現われ、仏崎に本尊の阿弥陀如来像や寺の文書が流れ着いたことを告げており、それを迎えて現在の威徳寺に収めたことが記されている。さらに別府湾のどこかに沈んだ島とともに千軒の家々も同時に眠っていると、過去に実際に存在した島として語られている。②の伝承は威徳寺の住職、瓜生多喜枝氏の語ったもので、この伝説の成立に沖の島在住の瓜生氏や威徳寺が強く関与した痕跡がうかがえる。⑦の伝承では、島に津浪が襲いかかり、島の沈没によって若い男女二人も海底に沈んで死に、叶えられなかった彼らの恋や死を惜しみ、漁師たちは神楽を奉納して供養し始めたと、祭祀の由来を語る。⑨の高麗島伝説は宮田に持ち出した祭神を祀ったとあり、高麗水の飲用のことや現在でも子孫が高麗焼の茶碗を秘蔵しているともいわれ、伝説としての特徴が強く表れており、また始祖神話としての性格も保持している。

## 7. 沈んだ島伝説「瓜生島伝説」の伝承様相

以上のように日本の沈んだ島「瓜生島伝説」も韓国の伝承と同じように、①「旅僧予言型」、②「言い伝え予言型」、③「神様・夢予言型」の三つの話型に分類できるものであるが、次では日本の沈んだ島「瓜生島伝説」を紹介しながらその伝承様相について詳しく論じてみたい。先ず「言い伝え予言型」に属する大分県の「瓜生島<sup>27</sup>」を紹介する。

今の<sup>のどか</sup>大分港外には、昔瓜生島という島が長閑に浮んで居り、沖浜という町や数箇村の漁村があった。その島には恵比須の社があった。島民の言い伝えとして、その神像の顔が赤くなると、島が波間に沈むと伝えられてあった。そして朝夕島民はその社に詣でて無事を祈って居た。然るに慶長元年七月或日、一人の島民が神像の顔の真赤に染まっているのを見て、大いに驚き、早速村々に告げて大騒ぎした。或者は船を出して本土に遁れ様とし、或者は予言を信じないで、島に留まろうとした。その時、島に住む真齋という按摩（別本では渡来人の良齋）は、皆の周章で騒ぐのを見て、苦々しく思い「神像の顔の赤くなったのは、俺が紅殻を塗ったからだ」と言った。島民は半信半疑で各々去就に迷っていると、やがて海が騒がしくなり、<sup>たんこう</sup>苔港の潮が一旦すっきり引いてしまったが、今度は海鳴りがして、山の様な浪が襲い来り、島を人一呑みにし、一夜のうちに全く島は海中に没してしまった。現在の濱町の恵比須社や威徳寺はもと島に在ったのを沈没後遷し祀ったのだという。

27 前掲注 26) 同書





沈んだ島「瓜生島伝説」に登場する「威徳寺」（大分市勢家町所在）

瓜生島が実在した島なのかどうかの問題になっているが、上記では国際貿易港として存在したとされる大分の沖の浜は瓜生島の中にあつたとされ、逆にいえば瓜生島は沖の浜のことであることが言える。上の伝説によればその瓜生島には恵比須社があり、島民の言い伝えとして、その神像の顔が赤くなると、島が波間に沈むと言ひ、島民は朝夕その社に詣でて無事を祈っていたとあって、他の伝承で語る一人の老婆が言い伝えなどを信じ毎日確認しに行く場面は見えない。また恵比須神を信じなかった者や悪者が懲罰を受けたのかどうかについての言及もない。ただ島民の言い伝えとして、その神像の顔が赤くなると、島が波間に沈むとあり、これは前述した「言い伝え予言型」に属するものである。「島民の中には舟に乗って逃げようとする者がいた」というのは、前掲⑥の伝承や韓国の④⑧の伝承に類似しており、洪水神話としての性格を有している。また血を塗るのではなく、紅殻を塗ったとあり、これは前述の「朱塗り型」に属するものである。あるいはまた「慶長元年七月或日、一人の島民が神像の顔の真赤に染まっているのを見て」と、島が沈没した年が「慶長元年七月或日」のこととし、「瓜生島伝説」が史実として語られている。記録によれば実際、慶長元年（文禄五年、1596年）、<sup>うるお</sup>潤七月十二日申の刻、マグネチュード六・九と推定される地震による津波があり、大分市、別府市では四～五メートルの津波が押し寄せた<sup>28</sup>という。このことについて岩瀬博氏は、元禄12年（1697年）『豊府紀聞』に慶長元年の瓜生島沈没伝説に触れてから、安政4年（1857年）に完成した『豊陽古事談』に瓜生島、久光島が描かれた地図が付載されているようになり、瓜生島の実在が信じられたと論じられている<sup>29</sup>。前述したように瓜生島伝説は威徳寺の

<sup>28</sup> 羽島徳太郎「別府湾海岸における慶長元年豊後地震の津波調査」（『地震研究所彙報』第60巻、一九八五）

<sup>29</sup> 前掲注3）に同じ。また瓜生島に詳しい橋本操六氏は、慶長元年（1596）閏7月の大地震で消失した沖の浜が、元禄12年（1699）以降は戸倉貞則が開書した『豊府紀聞』では想像上の島「瓜生島」に置きかえられたことにより、虚構と史実が混同し、加えて地震学者による「瓜生島地震」説によって沖の浜が忘れ去られたと記す。『豊府紀聞』には「且勢家村20余町北有名瓜生島、或又沖浜町」と、もともと瓜生島が存在し、別に沖の浜と呼ばれたと記す。（『大分歴史事典』（大分放送大分歴史事典刊行本部、一九九〇）の「沖の浜～沖の浜の瓜生島説は誤り～」）



沈んだ島「瓜生島伝説」の伝承地「恵美須神社」(大分市勢家町)

住職の瓜生多喜枝氏も伝授されており、瓜生島伝説の成立には沖の浜に在住した瓜生氏や威徳寺が強く関与したことがうかがえる。では「沖の浜」はなぜ「瓜生島」に変貌して語られるようになったのかであるが、記録によれば慶長元年の地震によって沖の浜は大きな被害や多数の死者数が出たとされ、その死者の鎮魂には威徳寺の瓜生氏が深く関わったことが考えられる。すなわち、すでに国際貿易港の沖の浜の海上ルートを通じて運ばれ伝承されていた「沈んだ島伝説」が瓜生氏の始祖神話として取り込まれ、大きな被害と死者を出した沈没物語とも結び付き、「沖の浜」は沈んでしまった「瓜生島」に置き換えられ新しい「瓜生島神話」が誕生する。それが威徳寺の瓜生氏によって唱導される中で「瓜生島神話」は民間にも伝わり誇張され、現在のような「瓜生島伝説」として伝承されていることが考えられる。

上記の「言い伝え予言型」の瓜生島伝説は、大分県速見郡にも「島山と碓岩の由来<sup>30</sup>」として伝承されている。

現在の島山と碓岩との十数町の間は、<sup>おおなみこなみ</sup>大波小波のさざめきを見せていて、里の子供等は、盛夏の候此の小波の間に、<sup>きぎ</sup>喜戯として遊び戯れているが、其の昔は一つの地続きにて、天の橋立も遠く及ばぬ、一大風景をなしていたものであった。この岬に包まれた一つの大きな入江が出来て、外国船さえも時々入港していたそうである。尚此の島山には、幾千年かを経たる<sup>おおくすき</sup>大楠木ありて、島山一帯を覆いたるを、彼の大英雄豊臣秀吉、朝鮮征伐の大軍を起すや、軍用船の船材として之を伐採したる由なり。何時の頃かは不明なるも、此の島山の一端に、弁財天様を祀れる社ありて、その中に高さ一間ばかりなる石の像立ちて附近の人々は、子の石像の顔面が赤く変ずる時、天災地変起こりて人名も危しと言い伝え、村人は此の石像を恐々と見、変化なきを見れば、先ず安心とその日々を送れりという。ここに<sup>ぶらい</sup>無頼の一青年ありて、常に村人の迷信を罵りいたりしに、或日のこと、此の島山の弁財天様如何なることのあるのか、其の顔面真赤に変わりを村人発見し、「弁財天のお顔の色が真赤になったぞ」「今に天地も覆る大地震か大洪水か、吾々の命も危い大事件

<sup>30</sup> 大分県教育会『大分県郷土伝説及民謡』(一九三一年)。荒木博之編、宮地武彦・山中耕作前掲注 26) 同書所収

が起るぞ」と、人心恐々として仕事も手につかず、家財道具を取りまとめ、避難する者其の数知らず、今二三日を経過すれば、豊岡の里は人の影すら見る事出来ぬであろうと思われる様になった。此の時、彼の無頼の一青年「彼の弁財天の顔が赤くなったからといって、何も恐れる事があるものか。色でも付けてみよ。赤でも青でも黄でも自分の好きな色になる」といって笑っている。村人が其の無謀に驚いているのを、心地よげに見つつ、「あのお顔の真赤になったは、此のわしが赤色を塗ったのだ。迷信に惑わされる様な者は、馬鹿の此の上もない者である。わしは村人の迷信を覚ましてやる心から、色を塗ったのだ。何も恐れる事はない」と言って、大威張りに胸をそらしていた。其の時である。今迄何事もなかった此の島山に、天地も砕けるばかりの大地震が起り、人々は「あっ」とばかりに大地にころげ廻ってしまった。しばらくして地震も止んだので、恐々立ち上がる其の瞬間、今度こそ、天地も砕けたかと思われる一大音響と共に、由布山の一角より黒煙濛々と立ち、一大爆発をはじめたのである。村人の命からがら逃げ行く様は、実に目も当てられぬ惨状であった。しかし程なくして噴火も止みれば、村人は恐々と、此の里へと帰り来て見れば、何時の間にか、長く海上に突き出で、天下の絶景であった島山は、其の先端を没して、現存の部分のみを残した。又彼の無頼の一青年を、この世から再び見る事が出来なくなった。其の後度々の地震にも、此の島山は少しも其の姿を変えることなく、吾等が豊岡の景勝の地として、夏季夕涼の人影を見せている。

少し長い引用になってしまったが、これは、現在の島山と碓岩は地続きであり、その島山の弁財天社には、高さ一間の石像があった。その石像の顔が赤くなったら、天災地変が起きるといふ言い伝えがあり、村人は毎日、石像を覗いていた。ある日のこと、弁財天の顔色が真っ赤になっていて、驚いた豊岡の住民たちは慌てて皆避難した。ところが村の若いならず者は「弁財天の顔が赤いのは、わしが色を塗ったからだ」と言って、避難した住民たちをあざ笑っていた。するとその時、大地震が起り、由布岳が爆発した。この地震で島山の先の方は、海中に沈んでしまった。碓岩は海中に沈んだ島山の先端にあたる場所であるという。

「石像の顔が赤くなったら、天災地変が起きると、いい伝えられ」という記述からみれば話型としては「言い伝え予言型」に属する。また「現在の島山と碓岩は地続きであった」というのは、前述の韓国の⑩～⑭伝承に近い。あるいはまた「このときの地震により由布岳が爆発した」と、大分の伝説としての特色を見せており、沈んだ島伝説が具体的に大分の地名と結びついて語られているのが面白い。

この「言い伝え予言型」に対して、柳田國男氏の紹介された長崎県南松浦郡久賀島「高麗島伝説<sup>31</sup>」は、島の祭神が信仰の篤い住民の夢枕に立って直接予言している点が面白い。

昔<sup>わらび</sup> 蕨<sup>わらび</sup> を去ること北へ海上十五里の所に高麗島という一小島があった。その住民の中に信仰の厚い人があったが、或る夜、その島の祭神がその人の夢枕に立って、「余の顔色が変わった時は、この島に一大変事が起こる故、よく気をつけていて、この島を逃れ出でよ」と告げた。でその人がその由を他へも告げたところ、同じ島民の内の、心善からぬ者がこれを嘲り笑い、かつ悪戯に、或る時ひそかにその祭神の顔を赤く塗った。住民等はこれを見て大いに驚き、舟を用意してこの島を逃れ出たが、島を離れること<sup>すうちよう</sup> 数丁にして、忽然として島は海中に没して仕舞った。逃れたものは、波の間に間に今の蕨の近くの、大野浜について、携えてきた祭神を今の宮田という所に祀り、その地近傍<sup>きんぼう</sup> に居住した。その当時飲用した水は今も高麗水といって幸泊の住民が飲用している。祭神を祀った宮田には、以前は婦人の入るのを禁じていた。その後住民等はこの土地に不便を感じて、蕨方面へ移り住み、その子孫は主として同郷の上の町という所に

<sup>31</sup> 『五島民俗誌』、荒木博之編、宮地武彦・山中耕作前掲注 26) 同書所収

住んだ。その子孫の一人だといわれている上村氏方には、その当時の高麗焼の茶碗を秘蔵しているという。祭神はその後宮田から今の蕨の大師堂の側に移した。高さ三尺ばかりの石仏がそれで現存している。高麗島のあったという所は、「コーライゾネ」と称ばれていて今尚家具類（陶器など）を釣り上げることがあるという。

上記は島の祭神が信仰の篤い島民の夢枕に立って予言しているもので「神様・夢予言型」に属するものである。先学の研究では、なぜこの沈んだ島伝説が「高麗島」「高麗水」「高麗焼き」などに拘っているのかについては言及がない。柳田國男氏はこの高麗島伝説の伝承者として、「そんな有りもしない高麗島の話などがかつぎだして、人を面白く惑はしめた」人物、すなわち「高麗島伝説」の伝播者として海上を往来した九州盲僧を想定されているが、なぜ古代朝鮮半島に存在した「高麗」という国の話として伝承されているのかについての説明はなされていない。

この高麗島伝説の伝承地である五島列島は、豊臣秀吉軍の朝鮮への出発地とされるところである。1592年と1598年に豊臣秀吉によって行われた「文禄・慶長の役（壬辰倭乱）」は、日本陶磁史では大きな発展を遂げる契機となる。朝鮮から引き上げるとき、何百人という陶工や職人を日本に連れてきた。筆者はこの高麗島伝説はおそらく、後で紹介する、平安末期頃（十二世紀）成立の『今昔物語』巻第十の「姫毎日見卒塔婆付血語第差十六」の説話と系統が違って、豊臣秀吉軍の文禄・慶長の役（壬辰倭乱）のとき、朝鮮陶工集団や彼らと関わる民間宗教者によってもたらした伝説であると考えられる。五島列島はこうした大陸との交流の拠点になった島であった。

前述したように、日本の伝承の殆どは顔に朱塗りをするものとなっており、顔にこだわっている伝承が主流となっているのに対して、韓国の伝承は弥勒の鼻に血塗りをする伝承が中心となっている。しかし次の大分県の「瓜生島陥没伝説<sup>32</sup>」には韓国の伝承を思わせるような鼻に拘る伝承が伝わっている。

別府郊外の海岸に聖人が鼻という処があり、ここは一遍上人が豊後上陸の地とも伝えるが、一遍上人は諸国巡錫の途、この地方に立寄られ、一時庵室を結んで、<sup>りゅうしゃく</sup>留錫せられた。その当時非常に勢猛烈であった別府郊外の地獄（噴湯噴気孔）の惨状を眼にして、遂に経石を以て埋める等の功があった（現在の鉄輪温泉一帯はその名残であると伝える）。その後上人は<sup>しご</sup>死期の近づいたことを知って、一日村民を集めて、「我入寂の期既に近づいた。然し吾が靈は常に此の地に在って愛護を垂れよう。先ず今後この地に災難の来る時には、この海岸に吾が刻んだ仏像の鼻が赤くなるであろうから、その時には<sup>じじやく</sup>急ぎ安全な地に通れるように」とい<sup>ほししも</sup>遺して示寂された。星霜幾百年を過ぎて、慶長元年の瓜生島沈没の大災害の時には、その語の通りこの石仏の鼻が赤くなったという。

この伝説は一遍上人の鉄輪温泉開拓の功績を語るものであるが、一遍上人の上陸地とされる現在の上人ヶ浜は、北石垣の海岸線に広がる上人ヶ浜公園の北側一帯を指し、上記のように昔は「聖人（上人、尚人）ヶ鼻」と呼ばれた。沈んだ島「瓜生島伝説」が一遍上人の鉄輪温泉開拓や上陸地の上人ヶ鼻と関わって伝承されているのは面白いが、他の「瓜生島伝説」では、蛭子像や仏像の面（顔）が赤となると村などが沈没するという伝承が主流をなしているのに対して、ここでは「聖人が鼻」や「仏像の鼻が赤くなると災難が起きる」とあり、鼻に拘っている点で韓国の伝承にきわめて類似する。またこの伝説は韓国の伝承によく見られる旅僧が予言をする「旅僧予言型」に属し、韓国の伝承との関連を考える場合、一遍上人の鉄輪温泉開拓の功績を語るこの伝承はきわめて重要な資料価値を有していると言える。

このように日本では旅僧が直接予言をする伝承は現在のところ珍しいと言えるが、この話型は次の新潟県西頸城郡名立町の伝承<sup>33</sup>にも見られる。

<sup>32</sup> 市場直次郎『郷土趣味雑話』一九三二、金洋堂書店）。荒木博之編、宮地武彦・山中耕作前掲注26）同書所収

<sup>33</sup> 小山直嗣『越佐の伝説』（一九七六、野島出版）



一遍上人の上陸地と伝わる上人ヶ浜（左）と現在の鉄輪温泉一帯（右）

昔、名立に五郎兵衛、お仲という漁師夫婦が住んでいた。十七、八の娘がおり、お今といった。村人が「このごろはどうして空が暗いのだろう」「半月ほど前から海が赤く見えるんだが、不思議なことだ」と話しているところに、旅の老僧がここを通りかかり、「昔、空がまっ暗くになり海がまっ赤になって大地がくずれ、あつという間に家も人も土の下に沈んでしまったことがあったそうだ」と言った。五郎兵衛は信じなかったが、お今は、「もしやあの方はえらい上人さまで、わたしたちの災難を救おうとして立寄られたのではないだろうか。ありがたいことだ」と、旅僧に手を合わせた。その夜”ドーン”という大きな音がして裏山が真二つに割れて崩れ落ち、部落は海へ押し出されてしまった。一瞬のうちに家も人も草も木も船も埋めつくされてしまったが、お今だけは旅僧の予言を信じて逃げていて無事だったという。

これは旅の老僧が予言するので「旅僧予言型」に属するものである。老僧が登場するのは、先ほどの別府市の一遍上人の伝承や韓国の伝承に近いものである。しかし、旅の老僧が通りかかりながら、「昔、空がまっ暗くになり海がまっ赤になって大地がくずれ、あつという間に家も人も土の下に沈んでしまったことがあったそうだ」と言うのは、他の伝承の「顔がまっ赤になったら島が沈む」と予言していることとは少しその趣向が違う。すなわち、この伝承では「仏様」とか「えびす様」のような対象物が語られていないのが特徴である。旅僧に手を合わせたり、その予言を絶対に信じようとしたりとするくだりは韓国の伝承にきわめて近い。また「ドーン”という大きな音がして裏山が真二つに割れて崩れ落ち、部落は海へ押し出されてしまった」とあり、他の日本の伝承によく見られる「津波による島沈没」を言うのではなく、地割れによって村が海へ押し出されたと語る点はこの伝説の特色を言えよう。これはおそらく大地震や大雨による地割れであったことが考えられる。

#### 8. 『宇治拾遺物語』の沈没伝説と「瓜生島伝説」

平安末期頃（十二世紀）に成立した『今昔物語』巻第十の「嫗毎日見卒塔婆付血語第差十六<sup>34</sup>」には沈んだ島「瓜生島

<sup>34</sup> 小峯和明校注『今昔物語二』（『新日本古典文学大系 34』一九九九、岩波書店）所収

伝説」とほぼ同じ話が記載されているが、ここでは十三世紀（1213～1221）頃成立の『宇治拾遺物語』の「唐卒都婆ニ血付事<sup>35</sup>」を取り上げる。

- ① 昔、唐に大きな山があり、その山の頂上には大きな卒塔婆が一つ立っていた。その山の麓の村里、年八十歳にもなる老婆が住んでいたが、日に一度、その山の峰にある卒塔婆を必ず見るものであった。 [老婆の卒塔婆参詣]
- ② 若い男たちは老婆の行動を奇妙に思い聞くと、祖先からの言い伝えとして「この卒塔婆に血の付く折は、この山は崩れ、深い海となろう。それを確認するため毎日見に来ているのだ」と言う。 [言い伝えの沈没予言]
- ③ これを聞いた男たちは、ばかばかしいと嘲笑って、血を出して卒塔婆によく塗りつけて里へ帰った。そして里の者たちも伝え聞き、この試しの行動に笑い合っていた。 [若い衆の悪戯の血塗り]
- ④ 次の日、老婆が峰に登って見ると、卒塔婆に血がたっぷり付いていたので、老婆は村中に告げ回ってから家に帰り、子や孫たちと一緒に家財道具を持って、慌てふためいて里から逃げ移った。 [老婆の避難]
- ⑤ これを見て、血を塗った男たちは手を叩きながら笑い、そのうち目の前の山がいきなり揺らぎ始め崩れて来た。老婆一人だけが子や孫を引き連れて早く逃げ去ったので無事だった。こうして山はすべて崩れて深い海となり、老婆を嘲笑っていた者たちはみんな死んでしまった。 [村沈没と悪人懲罰]

以上の『宇治拾遺物語』には、死者供養のための卒塔婆が登場するのが特徴で、祖先への供養が主張されている。両者のモチーフ構成を対照して示すと次のようである。

『宇治拾遺物語』の「唐卒都婆ニ血付事」と「瓜生島伝説」

	宇治拾遺物語	瓜生島伝説
I	老婆の卒塔婆参詣	島の蛭子神社信仰
II	言い伝えの沈没予言	言い伝えの沈没予言
III	若い衆の悪戯の <u>血塗り</u>	若者の悪戯の <u>朱塗り</u>
IV	老婆の避難	信仰者の避難
V	村沈没と悪人懲罰	島沈没と悪人懲罰

このように両者はほぼ同じモチーフ構成によるものであるが、『宇治拾遺物語』は、韓国の伝承のように旅僧が直接訪ねてきて沈没予言をするのではなく、祖先からの言い伝えとしており、「言い伝え予言型」に属する。また『宇治拾遺物語』は祖先からの言い伝えを固く信じ、死者供養のための卒塔婆への巡礼を着実に実行する老婆を登場させ、それを信じなかった村の若者などは懲罰され、善良な老婆だけが生き残ることとなっており、氏族の始祖伝承としての痕跡を留めている。また老婆が毎日確認しに行く対象物が神仏の像ではなく、卒塔婆となっているため、他の伝承に見える血を塗る個所としての顔、耳、鼻なども登場しない。さらに民間伝承の「瓜生島伝説」では、神像などに朱塗りをするのが中心となっているが、文献の『宇治拾遺物語』では韓国や中国によく見られる血塗り型が主流をなしており、この点では文献の方が固形を留めていると言えよう。筆者は沈んだ島「瓜生島伝説」は、平安末期頃（十二世紀）成立の『今昔物語』巻第十の「姫毎日見卒塔婆付血語第差十六」と系統が違って、朝鮮陶工集団などによってもたらされた伝承であると考えられる。

<sup>35</sup> 三木紀人他校注『宇治拾遺物語・古今説話集』（『新日本古典文学大系 34』一九九〇、岩波書店）所収

## 7. おわりに

従来、東アジアの沈んだ島伝説を話型として分類し、その中でどれが日本の「瓜生島伝説」と関わりがあるのか、具体的に論じた論考はなかった。今までの考察したように大分の「瓜生島伝説」は中国、韓国に見られる「言い伝え予言型」に属することが明らかになった。そこで本稿で論じたものを次のようにまとめてみたい。

(一) 先ず、韓国の洪水神話は兄妹結婚という近親相姦が神話の核心要素となっていると言えるが、洪水が起こるのは人類の悪によるものなのかどうか、その洪水の理由や原因がはっきり説明されていないのが特徴であり、またその洪水神話は始祖神話や創世神話としての性格が強く表れるものであった。これに対して沈んだ島「瓜生島伝説」では沈没の原因が昔からの言い伝えや神仏の予言を信じない悪者などにあるとする点において洪水神話と大きく相違する点であるが、韓国の沈んだ島伝説では実際に聖書の「ノアの箱舟」と同類の洪水伝説として語られるものがあり、また瓜生島伝説でも最後が始祖神話としての性格を保持している伝承も存在した。こうした意味で日韓の沈んだ島伝説は洪水始祖神話の一つとしてとらえることができるものであった。

(二) 日本の沈んだ島「瓜生島伝説」と韓国の「石仏、目赤くなると沈没する村」の話型は、神像の顔や石仏の鼻に塗るものが動物の血なのか、朱（絵具）なのかによって「血塗り型」と「朱（絵具）塗り型」に分類できた。このなかで「朱（絵具）塗り型」は日本の沈んだ島伝説に多く見られるものであり、弥勒の鼻に血塗りをする「血塗り型」は韓国の伝承の多数を占めるものであった。日本での「血塗り型」は平安末期頃（十二世紀）成立の『今昔物語』や十三世紀（1213～1221）頃成立の『宇治拾遺物語』、中国の「搜神記」などに見られるもので、「朱塗り型」より「血塗り型」の方が古形を留めていると言えるものであった。

(三) 日本の伝承は顔に朱塗りをする伝承が主流となっているのに対して、韓国の伝承は弥勒の鼻に血塗りをする伝承が中心となっており、この違いは今後究明すべき重要な課題である。鼻は息の出入りをする大事な部位であり、特に韓国の民間では石の弥勒仏の鼻を取って粉にして飲むと願いが叶うとされ、申し子祈願の対象にもなっており、こうした信仰は韓国全土に広く分布している。また、シャーマンの語る民間神話の「本解」でも弥勒神は金銀の皿を手に持ち天に祈願して男女を作り、その二人を夫婦として定め、人類を繁盛させる創世神として登場しており、ここで弥勒は神であり、人間の意思を天神に伝えるシャーマン的存在でもある。韓国の沈んだ島伝説において「弥勒の鼻穴から血が出ると災難が起こる」「悪人が弥勒の鼻に血を塗る」と語られているのは、宗教者が必死になって弥勒の鼻を守ろうとすることと無縁ではないであろう。またこうした鼻に拘っているのは一遍上人の鉄輪温泉開拓の功績を語る大分県別府の「瓜生島伝説」にも見られるものであった。水と関連の深い沈んだ島伝説において神仏に血塗りをするのは、たとえば雨乞いなどで動物の生首を池に入れてその血で池を汚して神の怒りをかい、雨を降らせる信仰とも無縁ではないであろう。

(四) 韓国の沈んだ島伝説は、西海岸に沿って北から南へと広範囲に渡って伝承されていることがわかり、海洋文学としての性格を有し、伝承者も女性ではなく、男性である特徴を持つ。また沈んだ島伝説は沈没の予言方式によって、「旅僧予言型」「言い伝え予言型」「神様・夢予言型」の三つの話型に分類できた。この中で「旅僧予言型」は韓国の沈んだ島伝説「石仏、目赤くなると沈没する村」、「言い伝え予言型」は日本の「瓜生島伝説」に多く見られた。韓国は直接神仏の化身とも言える旅僧が登場して予言しており、この点では神話的特徴を保持していると言えよう。これに対して日本は「神像の顔が赤くなったらこの島が沈む」と、昔からの言い伝えとして語られるものが主流をなしており、こうした意味で日本の伝承は伝説的特徴を保持していると言えよう。すなわち日本の「瓜生島伝説」は神話的特徴が後退し、伝説的特徴とも言えるその土地に因んだ神社や地名などの証拠をあげながら伝承されている。大分以外の日本の

伝承のほとんどは「神様・夢予言型」が中心となっており、この方が大分の伝承より古形を残していると言えよう。

(五) 韓国の場合、沈没の予言をするのは道僧が優勢であるが、地師・風水師、道士、過客などもおり、彼らの民間宗教者が沈んだ島伝説「石仏、目赤くなると沈没する村」を広めたことは間違いないであろう。また彼らは仏像に塗料を塗る陶工集団とも深い関わりがあった。では柳田國男氏の言う「高麗島伝説」の伝播者ははたして海上を往来した九州僧だったのかについての疑問であるが、高麗島伝承地の五島列島は、大陸との交流の拠点になった島で豊臣秀吉軍の朝鮮への出発地とされるところである。一五九二年と一五九八年に豊臣秀吉によって行われた「文禄・慶長の役（壬辰倭乱）」では引き上げるとき、何百人という陶工や職人を日本に連れてきた。筆者はこの「高麗島伝説」は平安末期頃（十二世紀）成立の『今昔物語』巻第十の「姫毎日見卒堵婆付血語第差十六」の説話とは系統が違って、「文禄・慶長の役（壬辰倭乱）」のとき、朝鮮陶工やその一族によってもたらされた伝説であると考え。その子孫の一人だといわれている上村氏方に当時の高麗焼の茶碗が秘蔵されているといい、高さ三尺ばかりの石仏がそこに現存していることや、高麗島のあったという所は「コーライズネ」と称され、今でも家具類（陶器など）が釣り上げられることもあるという。これは「高麗島伝説」がこうした陶工集団や彼らの祀る石仏と深い関連があることを証明してくれるものであろう。地震が先か伝説が先か、簡単には決めかねないが、大分の「瓜生島伝説」は、慶長元年（文禄五年、一五九六年）の大地震の津波災害の史実などと結びついて語られるものであった。この時期は豊臣秀吉による「文禄・慶長の役（壬辰倭乱）」時期と重なっており、被害の大きかった大分市の沖の浜は豊臣秀吉の武将たちが重要な港として使用した海上交通の要所であった。日本のすべての瓜生島型伝説の伝播経路を簡単にここだと一か所に絞ることはきわめて難しい問題であるが、少なくとも「高麗島伝説」や大分の「瓜生島伝説」に限って言えば、こうした海上ルートを通じての朝鮮陶工集団や彼らと関わる民間宗教者の活躍とは無縁でないだろう。沈んだ島伝説の中で語られる「神仏の顔や鼻に朱塗りをし、それによって島が沈没してしまった」という描写には、焼き物の塗料を扱って生業を営む陶工たちの姿が投影されており、沈んだ島伝説が彼らと深く関連していることを示してくれる。

(六) 大分の瓜生島伝説は威徳寺の住職の瓜生多喜枝氏も伝授されており、瓜生島伝説の成立には沖の浜に在住した瓜生氏や威徳寺が強く関与したことがうかがえる。では「沖の浜」はなぜ「瓜生島」に変貌して語られたのであろうか。記録によれば慶長元年の地震によって沖の浜は大きな被害や多数の死者数が出たとされ、その死者の鎮魂には威徳寺の瓜生氏が深く関わったことが考えられる。すなわち、すでに国際貿易港の沖の浜の海上ルートを通じて運ばれ伝承されていた「沈んだ島伝説」が瓜生氏の始祖神話として取り込まれ、大きな被害と死者を出した沈没物語とも結び付き、「沖の浜」は沈んでしまった「瓜生島」に置き換えられ、新しい「瓜生島神話」が誕生する。それが威徳寺の宗教者の瓜生氏によって唱導される中で「瓜生島神話」は民間にも伝わり誇張され、現在のような「瓜生島伝説」として伝承されたと考える。

(七) 最後に村が沈没するのは津波や地震によるものか、大雨によるものかの問題であるが、韓国の資料は津波による沈没よりは大雨による沈没の伝承が優勢を占めるものであった。これに対して日本の伝承は津波・地震による沈没の伝承が主流をなしており、この点が韓国や中国の伝承と大きく違うところである。こうした日本独特の自然環境や風土の中で沈んだ島「瓜生島伝説」は、新しく変化を遂げて語り継がれるものであった。

#### 参考文献

「瓜生島」調査会編『沈んだ島 別府湾・瓜生島の謎』一九七七、「瓜生島」調査会



権泰孝『韓国口伝神話の世界』（二〇〇五、知識産業社）

趙ヒョンソル「東アジアの洪水神話比較研究—神・自然・人間の関係に対する認識を中心に—」（韓国口碑文学会『口碑文学研究』Vol 26、二〇〇三）

朴ギョンヒ「安城・利川地域の石弥勒信仰の社会文化的研究」（「漢陽大学大学院修士論文」二〇〇六）

#### 付記

本稿は2011年11月7日、大分市のコンパルホールで行われた「古代朝鮮文化を考える会」における講演内容や、2012年5月19日、韓国釜山市の釜山展示コンベンションセンター（BEXCO）で開催された「韓国日本近代学会 第25回国際学術大会」において口頭発表した内容をまとめたものである。「古代朝鮮文化を考える会」の講演会では佐々木洋会長をはじめ、別府市在住の加藤正信氏と会員の皆様方に大変お世話になった。また韓国日本近代学会国際学術大会の際には李京珪会長をはじめ、立命館大学の仲上健一先生、三浦逸朗氏、韓国東義大学の鈴木啓孝先生に貴重な御意見とご協力を賜った。記して深く感謝申し上げる次第である。